

尊念和尚  
問答記



須長英男 著

---

# 尊念和尚問答記

(Web 版 第 1.1 版)

須長 英男

---

## 《注意事項》

本著作物は、著作権者の許諾を得ることなく自由に、複製し又は口述し、それらを公衆送信し又は無償で頒布することができる。

また、本著作物は、著作権者の許諾を得ることなく自由に、翻訳し、それを複製し又は口述し、それらを公衆送信し又は頒布することができる。

ただし、本著作物及びその翻訳物は、著作権者の許諾を得ることなしに、出版することができない。

また、翻訳物以外の一次的著作物は、著作権者の許諾を得ることなしに、作成することができない。

以上

四 次

|             |     |
|-------------|-----|
| せじめ         | 8   |
| 一、恤憲との対話    | 9   |
| 二、医師との対話    | 26  |
| 三、労働者との対話   | 41  |
| 四、労農との対話    | 51  |
| 五、血殺願望者との対話 | 72  |
| 六、亡僕人との対話   | 91  |
| 七、未婚女性との対話  | 106 |
| 八、被激との対話    | 121 |

|                   |     |
|-------------------|-----|
| 九、精神との対話          | 131 |
| 十、心地の対話           | 151 |
| 付録一、余事象法          | 171 |
| 付録二、天使通信          | 194 |
| 付録三、加重評価表         | 197 |
| 付録四、田口ノベル・カミックシート | 203 |
| 付録五、人間の構造         | 210 |
| 附録                | 212 |

尊念和尚問答記



## はじめに

ある地方の山寺に一風変わった和尚がいた。彼の名は、尊念。齢(よわい)七十六になるが、眼光するどく、檀家(だんか)を捕まえては説法を飛ばす、地元の名物和尚である。

彼は毎朝三時に起きては足芯呼吸を行い、それから本堂の掃除と御祈祷、更には庭掃除と座禅をしてからあさげを作る。何から何まで一人で寺を切り盛りしているので、てんやわんやの忙しさではあるが、人のためとあらばどいでもおもむき説教をする。そんな彼を敬遠する者もいるが、わざわざ遠くから彼を頼つて訪れる者もいる。

これは、そんな彼の問答を集めた問答集である。彼の言葉がきっとあなたに力を与えてくれると信じて筆を執った。さあ、どんな問答なのか?とくと御覧あれ!

## 一、官僚との対話

ある夏の曇下がり、尊念がいつものように山門で掃除をしてこねど、背広を手にした中年の男が石段を登つてくるのが見えた。やや小太りのその男性は、息を切らして汗だくになりながら山門にたどり着き、そして、尊念を見かけると、「や～、和尚さん。」の階段は、いつ登つてもきつついですな～。」と、汗をぬぐいながら尊念に話しかけた。

すると尊念は、

「百八段あるからの。四苦八苦するのも無理もない話じや。」

と、軽くあしらえながら笑つた。

「ところで、今日は、何用で来られたのかのう？」 そう尊念が尋(たず)ねると、

男は、

「もうすぐお盆なので、御先祖の供養に来させてもらいました。」と答えた。

「それは何よりなことじや。仏さんもさぞ喜ばれておる」とじやひ。どうじやな、  
帰りにでも庫裡(くり)に寄つていかれよ。粗茶を用意するでな。」そう尊念が応えると、  
「ありがたいことです。是非そうさせて頂きます。」と、男は言い、一礼をしてその場  
を去つた。

それから一十分ぐらにすると、その男は、寺の裏庭にやつてきた。尊念は手招きを  
して男を奥の間に迎え入れた。

「どうじやな、墓参りは？」そう尊念がたずねると、

「や～、日差しがきつくて焼けるようでした。でも、たまに来て、こうして手を合わ  
せてみると、心が洗われるようで清々しい気持ちがします。」と、男は答えた。  
それに対し、尊念は、

「そうじやひ。そうじやひ。」と深くうなずきながら応えた。

「とにかくで最近はどうじやな？だいぶ風当たりが厳しいようじやが？」

「そう尊念がたずねると、男は、

「そうでござります。最近は談合やら天罰やらで、やたら世間の風当たりが、厳しさを増しております。もつとも、我々の方にも、落ち度があるのですから、仕方のない話ではありますが・・・。」と、応えた。

そして、更に続けて、

「それに、自分で言つのもなんですが、最近ではモチベーションというか、やる気のない者がめっぽう増えて、我々の間柄でも霸氣のある者はほんの一握りで、ほとんどが事なき主義になつております。てまえみそではありますが、私が若いころにはもつと活気がありましたのに・・・。」と、男はため息ながら応えた。

「では、何で最近は、活気がなくなつてしまつたのかのつ。」

尊念が、そうたずねると、男は、

「平和な日々があまりにも永く続いたからではないでしょうか？人間、なまぬるい環境に長く漬かっていくと、なまくらになつてしましますからな。」と応えた。

それに対して尊念は、

「では、なぜ、そちは、やる気があるのかのう?」と、たずねると、

男は、

「そりやー私が入った頃は、まだ日本も高度成長期の真っ只中で、世の中もどんどん変わつていつたし、なによりも『私がやらなければ!』と言う氣概が役人にもありました。今でも、その気持ちには変わりはありません。」と答えた。

それに対して尊念は、

「そうじやうひ。そうじやうひ。」と、深くうなずいていたが、しかし、次のように言った。

「わしは、役人の役目とは、『未来を創造する』ことだと思つておる。もちろん、この国を直接導くのは、選挙で選ばれた議員であり首相ではあるが、じやが、きめ細かく国民をサポートしていくためには議員さん達だけでは不可能なのじや。また、専門知識を持つてこれらの議員さん達をサポートしていくのも、役人の仕事でもあると思うておる。その本分と目標を忘れておるからモチベーションが下がるのじや。役人たるもの、その職責を理解し、職務にプライドを持つことが、何よりも大事なことなのじ

や。わしは、少なくとも、そつ思つておる。」と。

尊念が、そう答えると、男は、

「もつともな話です。」と、頷(うなず)きながら応えた。

「それにしても、役人には、反省すべき点が、まだあるのう。例えば、天下りじやが、官製談合をしなければ民間に就職できないというのならば、これは役人の能力不足を露呈(ろてい)しておる。いつでも民間企業に引き抜かれる程に技能を身につけておれば、わざわざ不正な発注をせずとも、自ずとスカウトの声がかかる」とじやう。役人といえども、いつでも民間でやつていけるだけの能力を、つねひじりより自己研鑽(けんさん)しておかねばならんのじや。また、甘い誘いに乗らないよう、日々より金銭管理はしておかねばならん。特に支出を管理し、借金をしないことが大事じや。役人たるもの支出を伴う衝動買い等は特に慎むべきじや。常に家計を健全に保つことは、役人の本分なのじや。

「」のように尊念が言つと、男は、

「耳の痛い話です。」と、つづむきながら応えた。

そして、尊念は、次のように続けた。

「じゃが、わしが思うに、談合とは、決して悪いものではないぞ。」と。

尊念が、そう言つと、男は、

「それは、なぜでしょうか？」と質問した。

それに対して尊念は、

「公共事業を行なうのに民間企業が協力することは、決して悪いことではない。たしかに、民間企業が結託(けつたく)して入札の落札価格を高値に吊り上げる事は悪であるように思われる。じゃが、そのような場合は、単に落札しなければ良いだけのことじゃ。要は、役人が適正な落札価格を分かつていないうことが問題なのじゃ。例えば、公費を節約するために入札に競争原理を導入せよと主張する者がある。じゃが、極端に落札価格が低ければどうするのじゃ？『今回は大幅に経費削減できました。』と、もろ手を挙げて喜ぶのじゃらうか？そうではないじゃらう。落札価格が原価を割つては、企業はやっていけないのじゃ。」この場合は、必ずと言つてよいほど品質に問題が生じるであらう。じゃから、入札価格には、最低価格といつものがあるのじゃ。これを下

回る落札価格は認めるべきではない。一方、入札価格には最高価格というものもあるのじや。これをいくらにするかは政策によって決めるべきことじや。最高価格を最低価格寄りにすれば、経費削減につながり、最高価格を最低価格から離せば、落札企業は利益を得て民間の活力増進につながるのじや。じゃから、役入たるもの、最低価格と最高価格を見極める能力が必要なのじや。」と答えた。

このように尊念が言つと、男は続けて次のように質問をした。

「では、最高価格ぴつたりに談合した場合はどうするのですか?」と。

これに対して尊念は、

「そのときは、落札させてあげれば良かろう。財政支出を抑えたければ最高価格を下げて、産業を振興させたければ最高価格を上げれば良いだけのことじや。じつしても競争原理を持ち込みたいのならば、最高価格を最低価格まで下げていけばよかろう。そうすれば、体力の無い企業は談合についていくことはないじやろう。また、最高価格と最低価格は事前に公表しておいた方が良いのう。談合して最高価格を狙うもよし、競争して最低価格になるのもよしという訳じや。」と答えた。

これに対してもは、次のように質問した。

「では、入札者が全員最高価格以上の場合はどうするのですか？」と。  
これに対して尊念は、

「その場合は、不成立とすればよからう。そして、次回からは、入札の範囲を広げるのじや。例えば、最初は市内の範囲で入札を行い、それで不成立ならば今度は県内の範囲で入札を行い、それでも不成立ならば全国の範囲で入札を行なえば良かう。仕事を市外の者に取られまいと、市内の業者も必死になつて入札を行なうであらう。」と答えた。

「では、落札候補の業者が複数いる場合はどうなのでしょうか？」

「そう男がたずねると、尊念は、

「その場合は、役人の判断でどちらかに決めれば良かう。」と答えた。

「これに対して男は、

「それでは、また不正が生じるのではないのでしょうか？」と質問した。

それに対し尊念は、

「それは、そちらしからぬ答えじやのう。役人たるもの、常に職務にプライドを持つて臨まねばならないのじや。じつしても自信がなければ、くじ引きで決めれば良からう。」と答えた。

そう尊念が答えると、男は首をうなだれて縮こまつてしまつた。

それを見ていた尊念は、

「自信を持たれよ！未来のために努力なされよ！」と、強い口調で言つた。

そして、しばらくの間、男は沈黙していたが、おもむろに

「和尚さん。正直言つて私は迷つています。この先どうやつていけば良いのかと。」と言つた。

これに対し尊念は、しばらく手をつむつていたが、おもむろに

「わしが思うに、これからは、《善意》中心の世の中になるや。」と答えた。

尊念がそう言い終わると、男は、尊念を仰ぎ見て、

「善意が中心の世の中と申しますと？」と言つた。

それに対して尊念は、

「我々は、今まで永い間、嘗利主義を続けてきた。じゃが、それも限界にきてある。我々はもう変換点に來ておるのじや。このまま嘗利主義を続けておれば、我々は住む場所を失つてしまつことじやうひ。限られた資源の中で人類が永続するためには、何よりも人類が善良であることが必要なのじや。それは、企業とて同じことじや。じやから、これからは、企業も善良でなければ生き残れないのじや。」と答えた。

すると男は、

「では、善意中心の世の中になると、世の中全体はどう変わるのでしょうか？」と、たずねた。

それに対しても尊念は、

「まず、人々は、世の中全体を見て、そして、そこから、今、何を成すべきかといつ立場で行動することじやうひ。そして、私利私欲を自制し、自然と共に行動するようになることじやうひ。人・物よりも、多くを自然物に求めるようになることじやうひ。そして、私生活は、質素なものになり、経済活動は、今よりも穏やかなものになることじやうひ。」と答えた。

それに対し男は、

「では、経済は、今よりも落ち込んだものになるのでしょうか?」と質問をした。

それに対し尊念は、

「経済は、落ち込むことはなかろう。穏やかではあるが、確実に発展していくじゃろう。じゃが、今とは、全く別の社会にはなる」とじやろいだ。」と答えた。

「しかし、そのような社会に、そう簡単になるとは思えませんが?」と男が訊くと、尊念は、

「確かに、そうなるには、時間がかかるじゃねい」。と答えた。

そして、尊念は、

「じゃが、それは、確実に進展する」とじやねいだ。」と答えた。

それに対し男が、

「私には、そのような事は信じられません。」と叫びた。

尊念は、

「信じよつが信じまいが、そうなる」とは確実なのじゃ。じゃから、そちたち役人は、

そうした世の中の変化の芽を、確実に育ててゆかねばならないのじゃ。具体的には、その様な企業に対して、資金と技術をサポートするのじゃ。そして、立ち上げたばかりの企業に対しては、経営技術の指導を行うのじゃ。そのようにして善意の芽を育てていけば、やがて、新しい世の中に変わっていくことじやるわ。」と答えた。

しかし、それでも男は、まだ首をかしげ続けていた。

それを見ていた尊念は、

「そちたち役人は、未来の社会を創るのが役目であろう。何が大切なか？今後何が求められるのか？今一度よく考えてみなされ！」と応えた。

それに対して男は、しばらく考え込んでいたが、「和尚さんの言うことは、一理あるかもしません。しかし、今日は、まだ納得することができません。」と言った。

それに対して尊念は、「やむなし」と思い、軽くうなづき返した。

そして、しばらくの沈黙が続いた後、尊念は、別の話しを切り出した。「話しさは変わるが、そちは、確か道路関係の仕事をしておったのう？」

そう尊念がたずねると、男は、

「はい、そうです。」と答えた。

それに対して尊念は、

「話は変わるが、交通事故は、なんで無くならんのかのう? そちはどう思つておるのかのう?」と、たずねた。

それに対して男は、

「私が思うに、車がある限りは、交通事故はゼロになる」とはないと思います。これは文明の宿命でしょくな。」と答えた。

それに対して尊念は、

「では、小学生は、なぜ新幹線に轢(ひ)かれないのであるのかのう?」と、たずねた。

それに対して男は、

「そりや和尚さん。新幹線は車と違つて、走つている場所が違いますからな。高架の上を小学生が、歩くことはありません。」と答えた。

それに対して尊念は、

「そうじゃ。わしが言いたいのはそこなのじゃ。」と応えた。

それに対して、

「そこと申しますと？」と、男がたずねると、

尊念は、

「わしが言いたいのは、人と車が道路を共有するから交通事故が起きるのじゃ」ということなのじゃ。人と車が別の道を通れば、人は、交通事故に遭いつことはないはずじゃ。」と答えた。

それに対して男が、

「別の道と申しますと？」と、たずねると、

尊念は、

「地下じやよ。」と答えた。

それに対して男が、

「地下と申しますと？」と、たずねると、

尊念は、

「地下道のことじゅよ。ほれ最近では、リーアモーターカーなるものがあるであらう。あれを地下に走らせて、荷物を運ばせるよつにするのじゅ。そうすれば、少なくとも宅配便のトラックに子供がひかれることはなくなるであらう。それに環境にも良さもうでな。どうじゅ、名案であろう。」と答えた。

それに対して男は、

「しかし、それには膨大な予算が掛かりますな。今の時点では、夢の話でしょ。」と応えた。

それに対して尊念は、

「確かにそうじゅう。じゅが、かつての役人は、全国の津々浦々まで水道網を引いたではないか？ そちも、やううと思えばできるのではないかのう？ 予算が無ければ、民間の力を借りてみてはどうじゅ。」と言った。

それに対して男は、

「しかし、それにも、厳しいものがありますな。日本全国に地下道を引くとなると四百兆円以上のお金が掛かりますな。」と応えた。

それに対しても尊念は、

「何事もできないと思つてゐる間は、できないものじや。じゃから、まず『できない』と思わないところから始めなことが大切じや。試しに丸の内あたりでやつてみてはどうじや？小規模の実験ならば、さほど予算も掛からんじやう？それで調子が良ければ順次拡大していけば良いだけのことじや。」と言つた。

それに対して男はしばらく黙つていたが、

「そうですね。今度、政府の審議会がありますので、そういう意見もあつたということは言つておきましょう。」と言つた。

尊念は、笑みを浮かべて、

「そうか、言つてくれるか。わしのわがままですっかり長引かせてしまつて悪かつたのう。」と言つた。

それに対して男は、

「いえいえ、まだ余裕はありますから大丈夫です。でも、そろそろおないとまさせていただきます。今日もいろいろ話を聞かせて頂きありがとうございました。」と言つて、

席を立つた。それから、尊念は、男を山門まで見送り、ていねいにおじぎをして男と別れた。階段を下る男のつしろ姿を見ながら尊念は、「しつかりなされよ。これからが大事なのじゃ。」と、心中で励ました。

いつしか日も傾き、裏山ではヒグラシが鳴き始めていた。尊念は、彼の後姿が見えなくなるまで彼の姿を見送っていた。

## 一、医者との対話

夏が過ぎ、朝の空気がしつと肌に感じられるようになった頃、尊念がいつものように、お墓で掃除をしてくると、遠くで誰かが墓参りをしているのが見えた。そこで、そろそろと近づいてみると、年頃では三十代前半のメガネを掛けた若い紳士が熱心にお墓に向かって手を合せていた。青年は、尊念に気が付くと立ち上がり、尊念に向かって一礼をした。尊念も、これに応えて合掌した。それから、青年は、再びお墓に向き直ると、お墓に向かって手を合わせた。

尊念は、青年のかたわらまで来ると、こう問いかけた。

「朝早くから、信心深いことです。失礼ながら、お身内の方ですか?」と。

尊念が、そうたずねると、青年は、

「いいえ、違います。」と答えた。

「では、お知り合いの方ですかな？」と、尊念がたずねると、

青年は、

「まあ、そのようなものです。」と答えた。

よく見ると青年は背も高く、見るからに立派であったが、その横顔にはどことなく陰鬱(いんうつ)な様子が感じられた。尊念はあまり深入りするのは失礼に当たると思い、その場を立ち去らうとしたが、

その時、青年は、

「和尚さんは、毎朝こからの掃除しておられるのですか？」と、たずねた。

それに対して尊念は、

「そうじゃ。わしは、毎日こじを掃除しておる。」と答えた。

これを聞いた青年は、

「それを聞いて安心しました。この人は、実は、私の患者だった人です。」と答えた。

それを聞いた尊念は、

「そちは、お医者さんであつたか？仏さんなり、わしも存じておる。」と応えた。  
しかし、青年の表情は、相変わらず陰鬱なままであった。

それを見ていた尊念は、

「仏さんは、わしが一生涯面倒を見るでな。そちは、安心なされよ。」と応えた。  
しかし、それでも青年が浮かない表情をしていたため、尊念は、  
「何か、悩み事でもおありますかな？」と詰(き)いてみた。

これに対しても青年は、

「いいえ、特に悩み事はありません。」と答えた。

それに対しても尊念は、

「悩むことは良いことじや。大いに悩みなされ！」と応えた。

これを聞くと青年は、急に顔を赤らめ、

「悩むことの一体どじが良いことなのですか？」「くら悩んだといひで人の命は救え  
ない。」と激しく応えた。

これに対しても尊念は、いつも癖(くせ)がでてしまつたのう、と後悔しながらも、

「確かに、悩むだけでは人の命は救えない。じゃが、人は悩むことによって成長するものじゃ。成長すれば、それだけ多くの命を救うことができるじゃう。」と答えた。

これに対する青年は、

「確かにそうかもしません。しかし、今、私に必要なのは人を救う技術なのです。私は、毎日多くの人の死を目にしています。救えた命もあれば、どうすることもできない命もあります。私は、彼らの命を救いたいのです。」と答えた。

それに対する尊念は、

「気持ちはわかるが、物事は一朝一夕に、成るものではない。焦ってはいけない。今まで通り、努力をなされよ。コツコツとした日々の努力の先に、成果は実るものじゃ。」と答えた。

それに対する青年は、

「では、和尚さん。絶対助からない命に対して、あなたは、私にどのように向き合えれば良いとおっしゃるのでしょうか?どのように技術が進歩しても、人は、永遠に

生きられるものではありません。それでも私は日々治療に向き合っているのです。私とて、本当は、全ての患者を救いたいのです。」と、吐く呑み言つた。

それに対する尊念は、

「確かに全ての人間を救うことは難しい。じゃが、治る可能性が1%でもあるものならば、人はそれに向かって努力すべきじや。また直る可能性が全く無い場合でも、延命の努力はすべきなのじや。なぜならば、ほんの数日延命であつても、人の魂が救済される場合があるのじや。多くの者は、この世に目的なく生まれ、仕方なく死を迎えるものと信じてゐる。じゃが、このような考えでは、人は決して救われないのじや。まず、最初に自覚しなければならないことは、人生とは、試練の場であり、この試練の場において、人は忍耐と努力により、魂を磨くことができるということじや。そして、病気もその手段の内の一つじや。苦痛の中でこそ、人は心を磨かれ、より高いレベルに進歩していく。これこそ、人生の目的であり目標なのじや。じゃから、ほんの数日であつたとしても、患者に己を省みる時間を与えてやりなされ。そうすることが、患者への、最期の奉仕となるのじやから。」と答えた。

これを聞いて青年は、驚いた。今までそんなふうに人の最後を考えたことはなかつたからである。しかし、あまりにも多くの患者が、絶望の中で死んでゆくを見たので、病気によつて心が磨かれるという尊念の言葉は、とても信じじうことができなかつた。そこで次のような質問をしてみた。

「私は、多くの患者が絶望しながら死んでいくのを見てきました。それでも和尚さんは、病気によつて患者の心は磨かれるとおっしゃるのでしようか？」と。

それに対して尊念は、

「確かに多くの者は、絶望の中で死んでゆく。じゃが、その事は、彼らが人生とは何かを知らないから起きるのじや。多くの者は、人生とは所有し楽しむものだと思うておる。じゃが、それは勘違いなのじや。人生とは、『修行』そのものであり、じやから当然苦しいのじや。じゃが、その苦しみこそが、魂を磨くのじや。例えば、苦痛の中にはつても、『ああ、私の魂は、苦痛によつて磨かれてゆく…』と思つうことができるのならば、苦しみの中にあつて、怒ることは決してないのじや。そして、仮に、死が近づいたとしても、『ああ、私は、最後の最後まで魂を磨きながら死んで

ゆくのだ…』といつてゐる者は、安心を得ながら死んで逝(ゆ)くことがであります。そして、このよつたな者は、決して絶望をしたりはせぬのじや。じやかひ、お医者さんは、末期の患者にさとつてやる』ことが大切なのじや。『最後まで諦めてはいけない。自分のすべきことをなされよ。』と。』と答えた。

それに対する青年は、半信半疑に思ひながらも、尊念の言葉には一理あると感じていた。しかし、仮に病気が魂を磨くとしても、なぜ死に至らしめるのか?までは、理解できなかつた。

そこで、次のように質問をしてみた。

「和尚さん。病気が魂を磨く手段だとしても、なぜ、病気は人を死に至らしめるのでしようか?」と。

これに対する尊念は、

「世の中の全ての現象は、自業自得によつて生じるものなのじや。何人も、これら逃れることは出来ない。これは生きる上でのルールなのじや。このルールを冒す者、例えば、自分を大切にしない者や貪る者、無知な者は、病気になる。そして、

時には死に至るのじゃ。これは、ルールであり、どうすることも出来ない。じゃが、このルールが、人生において人の魂を磨いておるのじゃ。死というハンディを背負つてこそ、人は真剣になるのじゃ。じゃから、極端にルールを冒す者は、その代償として、死は、避けられぬのじゃ。じゃが、そのことに、失望することはない。たとえ、人がいかなる悪事を行つたとしても、常に、その時点で取り得る《最善の道》というものが用意されておるのじゃ。その事に気付けば、人はいつでも回復をすることができる。そして、仮に死が避けられぬとしても、人は、少なくとも魂を磨くことができるのじゃ。」と答えた。

これを聞いて青年は、少し気分が晴れたような気がした。今まで患者を救えないのは、自分のせいであると信じてきだが、それが、必ずしも自分のせいではないと言われて、気分が楽になつた。また、どんな困難な状況においても、最善の道があるという尊念の言葉にも励まされた。だが、それでも、全てが自業自得であるという尊念の言葉には、まだ腑(ふ)に落ちない点があつた。

そこで、青年は次のよつな質問をしてみた。

「では、生まれながらにして病氣である人はどうなのでしょうか？彼らもまた自業自得であるとおっしゃるのでしょうか？」と。

これに対して尊念は、

「自業自得には、低いレベルと高いレベルの一一種類あるのじゃ。まず、レベルの低い自業自得とは、先のように自分の悪行の成果として病氣を得るよつな場合じや。

そして、レベルの高い自業自得とは、自分にさしては非はないが、世のため人のために得る自業自得のことじや。これは、魂をより磨くために、自分に高い目標を課した場合に現れる。身障者となる者も、同様なのじや。」と答えた。

しかし、青年は、それでも、死んでしまっては元も子もないのではないかと考えた。そこで、次のような質問をした。

「若くして亡くなつてしまつ場合は、どうなのでしょうか？」と。

それに対して尊念は、

「仏教には、輪廻転生という教えがある。人は、この世での経験を踏み台に、来世

で再び生を受けるという教えじや。この世を基準に考えるのであれば、若くして死ぬことは短い生涯でしかない。じゃが、あの世を基準にして考えるのであれば、若くして死ぬことは、ほんの一瞬この世にお邪魔しただけのことなのじや。野球で言えば、ワンポイント・ピッチャーのようなものじや。じゃが、たとえ、短い一生であつたとしても、それを悔いてはいけない。彼または彼女は、両親に多大な影響を与えて、ひいては社会全体に影響を与えるからじや。それこそ、彼または彼女の大きな功績なのじや。もし、そちが、輪廻転生を認めないとしても、彼らの功績は認めることじやろひ。」と答えた。

青年は、輪廻転生など信じなかつたが、幼い命が、たびたび社会に変革をもたらすことを知つていた。しかし、そのことは、青年の心を、ますます当惑させた。自分はひたすら命を救うことが第一だと考えてきたが、尊念の教えは、『死』もまた大事であると言つてゐるよに聞こえたからである。

そこで次のような質問をしてみた。

「では、私は、幼い命や難病に苦しむ人を、むしろ救わない方が良いのでしょうか?」

と

それに対する尊念は、

「そちは、医者じやろつ。医者なら、こつでも全力で患者を救つものじや。」と言つた。

それに対する青年は、

「それでは、和尚さんの言つ患者の功績が、なくなつてしまつのではないのでしょうか？」と言い返した。

それに対する尊念は、

「そのような功績は、元来必要ないのじや。人の心や社会が、そもそもその様なものを起こさせるようになつてゐるからこそ、そのような功績が必要となるのじや。その様な経験がなくても、人は、元来立派に成長していくけるものなのじや。」と答えた。

それを聞いて青年は、また一つ氣分が晴れたような氣がした。そして、また、少しだけ医者としての自信を取り戻したような気がした。そこで、つこでに、もう一つ

の悩みについても質問してみたいと思つた。

「では、和尚さん。どうすれば医療事故は、防げるでしょうか?」と。

これに対し尊念は、

「医療事故は、完全に無くすことはできない。なぜならば、人間はミスをすることが  
によって進歩するからなのじゃ。じゃが、そのような理由で、罪も無い患者が、日々  
亡くなるわけにはいかん。やはり、できることは、やらねばならぬであるわ。」と答  
えた。

そして、更に続けて尊念は、次のように言つた。

「まず最初に、そちが取り組むことは、医療事故を『起こせない』ようにすること  
じゃ。例えば、医療器具ならば、その差込口の形状を目的別に異なる形にすること  
で、誤った接続ができないようにすることじゃ。点滴などでは、患者さんが誤って  
外さないように、強固なカバーで患部を覆い、更に鍵がかけられるようにすること  
じゃ。更に、コンピュータを活用することも肝腎じゃ。そちらは、既に、コン  
ピュータを導入していることじやうが、単なるデータ管理だけでは不十分じや。

例えば、タグで薬剤の種類と量を検証したり、内視鏡の画像に色を付けて、見やすくなることは可能なはずじや。これらを活用すれば、医療事故は低減する」とじやろ。更に、重要なことは、医療の『基準と手順』を明確にして、それらを共有することじや。最近では毎日の病院もネットワークでつながっておる」とじや。じやがら、それらを、誰でも参照できるようにしておへ」とは、大事な」とじや。じやが、たとえ、これだけの努力をしたとしても、医療事故をゼロにする」とはできないじやろ。人間が関わる以上は、医療事故はゼロにはできないこのじや。我々ができることは、これらを使って限りなく、医療事故をゼロに近づける」とだけなのじや。」と。

尊念がそのように言つと青年は、すっかり仰天してしまつた。尊念が博学である上に、尊念の言つてこなことが、日々の業務に忙殺されてこる自分には、とてもできそうにないと思えたからである。

すっかり書きはじめてしまつた青年の顔を見て尊念は、「たしかに、わしの言つておる」とは、現状では難しこ」とじや。じやが、出

来ないと思うてゐる間は、何事も出来ないものじゃ。じゃから、まず、出来ないと思わないことが大切なのじゃ。そして、今一つコソを言えば、まず小さい事から始めることじや。医療機器の改善にせよ、コンピュータにせよ、そち一人でなんとかするには確かに無理じや。じゃが、ちょっととした時間を作つて、工夫することは可能なはずじや。そして、少しずつできる事を拡げていくのじや。やつすれば、やがては、本当にできるようになることじやろい。」と答えた。

これに對して青年は、しばらく黙つていたが、おもむりこ、

「分りました。和尚さん。できることば、やつてみましょい。」と応えた。

これを聞いて尊念は、安堵(あんび)した。

気がつけば、朝日は随分高く昇り、青年のほほに差し込んでいた。青年は、長々と話しこんだことを詫(わび)て、一礼をすると、その場を去つていった。

それから青年にお日にかかることはなかつたが、尊念は、日々厳しい医療現場で生と死に向き合つ彼の姿を、時々心に思い浮べた。そして、日々修行にいそしむ自分の姿と重ね合わせた。

そして、思い出したかのよつて、

「人生とは、つづくつづくもつて修行なり。」と咳(つぶや)いた。

そう言って尊念が畠をやると、辺りには、遅咲きの彼岸花が咲き乱れていた。

## 二、労働者との対話

秋空の良くな晴れ上がった日に、一人の男が寺の境内(けいだい)に来ていた。年のころでは、四十歳なかば。中肉中背ではあつたが、顔色も冴えず、なにやら疲れきつた様子でベンチに座つていた。彼を見かけるようになつたのはここ半月ばかりのことである。今日のようによく晴れた日には、本堂脇の大きなイチヨウの木の木陰で、何をするでもなく小一時間ほどボーとしながら時を過ごしていた。尊念は、前から彼のことが気にかかるつてはいたが、今日は意を決して、彼に声をかけてみるとした。

「いい天気ですね。今日はお休みですかな?」

そつ尊念が、たずねると、男は、

「ええ。まあ。そういうです。」と応えた。

しかし、その声には張りがなかつたので、尊念はいつもの癖(くせ)でいつたずねた。

「何か悩み事ですかな?」と。

これに対しても男は、

「ええ。まあ。そんな感じです。でも、いい感じですね、せんとく楽になります。」

と応えた。

これに対して尊念は、

「そうじやな。人間にとって自然は一番じや。」と応えた。

男は、しばらくボ～としていたが、思に出したように、次のよつて尊念に質問をした。

「とにかく和尚さん。仕事とこつものは、どうしたらうまくこつものなのでしょうか?私は二十年もサラリーマンをしていますが、いまだにうまくこつたことがありません。いつも苦労の連続ですよー。」と、つぶやいた。

それを聞いた尊念は、

「人はそれぞれの立場で苦労をするが、それは、皆、修行なのじゃよ。そして、どんな苦労にも価値というものがあるのじゃ。」と答えた。

これを聞いて男は、尊念のほうに向き直り、「修行ですか？でも、こんなに苦労をする修行なら、止めてしまいたいものですね！」と応えた。

これを聞いた尊念は、少し間をおき、

「ところで、そちは、人生の目的といつもの知つておるのかのう？」と訊いた。

これに対して男は、すぐさま、

「人生に、目的なんかあるわけないじゃないですか！」と応えた。

これに対して尊念は、

「人には、人生の目的といつもの、ちゃんとあるのじゃ。全てはいつも、その目的に沿つて最善最適に進んでおるのじゃ。」と答えた。

これに対して男は、声を荒げて、こう言った。

「そんなはずはない。もしさうなれば、私がこんな苦労をやるはずはない。」と。

それに対する尊念は、

「よいか。人生の目的とは、『自分の心を高める』ことなのじや。それは苦労しておると言つておるが、苦労はそち自身を高めておるのじや。」と言つた。

それに対する男は、

「確かに、苦労することによって、自分自身が高められたこともありますが、だからといって、それが人生の目的にかなつてこるとは思えません。」と応えた。

これに対する尊念は、

「人生の目的とは、自分の心を高めることなのじや。じゃから、苦労をした分、人は人生の目標に向かつたことになるのじやよ。」と答えた。

しかし、それでも男は、

「それでも、私は、今より楽になりたいのです。なにも毎日暇して生きたいとは、思つていません。せめて、もう少し効率的に、仕事ができないものかと考えているだけなのです。」と応えた。

これに対する尊念は、

「そちは効率的と言つが、どうこう」とが効率的じゃと思つておるのかのう？」と、たずねた。

これに対する男は、

「仕事が計画的に進み、上司とも部下とも、『ノリゴニケーション』がスムーズにでき、毎日残業しないで帰宅できる」とです。」と答えた。

これに対する尊念は、

「仕事を行う上で最も大事なことは、仕事の『基準と手順』を定める」と。次に大事なことは、仕事の結果を『評価』し、それを基に、基準と手順を見直すことじや。この二つが揃(そろ)つてこそ『改善の輪』は、回り始めるのじや。」と言つた。

これに対する男は、

「でもなぜ、改善するためには、この二つが揃つていなければならぬのでしようか？」と質問した。

これに対する尊念は、

「人間というものは誰でも、自分のことはよく分かってあるようで、その実、意外と自分のことは分かつてはいないものじゃ。じゃから、自分自身を分かるためにには、まず何がしかの基準が必要になるのじゃよ。そして、その基準と自分自身の現状とを比較することによって、人は、初めて、自分自身を知ることができるようになるのじゃ。自分を知ることができれば、それを基(もと)に改善していくこともできるのじゃ。じゃから、基準と手順を定めることは大事なのじゃ。そして、その通りに行い、その結果を評価することで、仕事の基準と手順の質が進歩し、やがては仕事そのものが、改善していくのじゃよ。」と答えた。

これに対する男は、

「なるほど確かに、仕事の基準と手順を定めることが重要かもしません。ですが、私の会社でも、基準書・手順書なるものはあります。ですが、だからといって、仕事が楽になつてはいるとは思えません。」と云つた。

これに対する尊念は、

「では、そちの会社は、仕事が一段落するたびに、仕事の問題点を整理して、元に

なつた基準書と手順書の見直しを行つておるのかのう?』と質問した。

これに対して男は、

『いいえ、行つてはおりません。』と答えた。

これに対し尊念は、

『何事も、評価する』ことは、大事なことじや。『評価することは、創造することである。』とニーチェも言つておるひ。まず、過去を反省し、それを未来に生かすことで、改善の輪は回り始めるのじや。仕事がうまくいかない原因は、そこにあるそつじやのう。』と答えた。

これに対して男は、しばらく黙つていたが、

『確かに、基準書や手順書を見直すことの重要性は、分かりました。でも、私の毎日が雑然と過ぎてゆくのは、これも基準書や手順書を評価しないことに原因があるのでしょうか?』と質問をした。

これに対して尊念は、

『多くの基準と手順の中でも最も重要なものは、『計画の基準と手順』なのじや。そち

の会社でも仕事をするときには、計画を立てるじやろ。じやが、基準と手順なくして、立派な計画は立てられないのじや。じやから、まあ、計画の基準と手順を定めなされ。そして、それを基に計画を立て、実行し、評価をするのじや。いうことで、仕事全体の調整が付き、日々の茶飯事には流されなことじやろ。」と答えた。

男は、尊念の言葉に耳を傾けた。言われてみれば、自分の仕事の仕方は、全くないないような気がした。そこで男は、もう一つ悩み事も、尊念に質問してみようと考えた。

「では、和尚さん。どのようにすればアドバイスをもらうのでしようか？」と。

男が、そう質問をすると、尊念は、

「まず最初にいえることは、アドバイスは、『内から外へ』が原則じやとうことじや。会社であれば、まず最初に部下に相談することじや。そして、次に上司に相談することじや。そして、最後に依頼元と相談するのじや。間違つても、最

初に依頼元に約束などをしてはいけない。その様なことをしては、あいだに立つ者の立つ瀬が無くなるところのじや。」と答えた。

それに対してもは、なるほどと思ひながらも、

「でも、いきなり部下に相談するなんて、面子(めんつ)が悪いですね。」と応えた。

それに対して尊念は、

「確かに、いきなり部下に相談することはバツの悪いことかもしれん。じゃが、本気で部下のことを思ひのならば、面子や体裁(ていざい)など気にすることはないのじや。そして、正直に、真摯(しんし)に「ヨリゴニケーションをすれば、言葉だけではなく、誠実さも、きつと部下に伝わることじやろつ。」と答えた。

それを聞いて男は、すくと立ち上がり、尊念に向かって、

「そうですよね! きつとやうですね!」と言つた。

これを聞いて尊念は、

「そうじや。そうじやとも。じゃが、正直であるためには、忍耐と勇氣が必要じやぞ! くれぐれも、つまらぬプライドにて、こだわるではない。」と言つた。

それでも、男は、すっかり明くなり、

「今日は、良い話を聞かせてもらいました。また、遊びに来たいと思います。」と言つた。

それに対し尊念は、

「いつでも来られよ。今度は、もう少し、ゆっくりと話を聞くでな。」と応えた。  
そして男は、大きく深呼吸をすると、尊念に一礼をしてその場を去つていった。帰る男の足取りは、気持ち軽くなつたようにも思えた。

そして、天を仰げば、秋空はどこまでも高く、その中を、赤とんぼの群れが、気持ちよさそうに飛んでいるのが見えた。

## 四、ニートとの対話

木枯らしが吹き、木々が葉を落とし始めたころ、尊念は、ある檀家の依頼で、とあるお宅を訪ねていた。というのも、こぢらのお宅の「子息」が、もつ三年以上も学校に行かず働きもせずで、困り果てた両親が、尊念の噂（つわさ）を聞き、親類のつてをつたって、尊念に息子の指導をお願いしてきたからである。

尊念は、玄関で丁重に母親に挨拶（あいさつ）をし、そして、応接間で母親より今までの詳しい経緯を伺（うかが）つた。青年は、食事やトイレ・お風呂以外は、ほとんど自分の部屋の中に籠（こ）もつたきりで、今回も同席はしていなかつた。そこで尊念は、母親の案内のもと、青年の部屋を訪ねることにした。

二階の奥にある青年の部屋は、曇りガラスのドアとなつていたが、昼間でも内側は

暗く、カーテンが閉まっている様子であった。

母親が、

「透(とおる)たつーお姫さんですよ。お寺の和尚さんが、お見えです。一度でいいからお話を聞いてほしこと、おっしゃっていますよ。」と言つたが、まつたく返事がなかつた。

お母親は、立て続けに息子の名前を何度か呼び続けたが、ドアの向こうからはこつこつに返事がなかつた。そこで、尊念は、ドアの前でしばりく青年を待つことにした。それから一時間くらい待つた頃、やつと部屋の中から青年が外に出てきた。青年は、ドアの前で座禅を組む尊念を見てギョッとしたが、そのまま黙つて一階のトイレに行つた。そして青年が部屋に戻つて来ると、先ほどの坊さんが部屋の前にはいなかつた。もしやと思い、自分の部屋に急いで入つてみると、部屋の真ん中に尊念が座つていた。尊念が青年に非礼を説びようとしたその瞬間、

青年は、

「びけんじやね～よ。」と言しながら、尊念に飛びかかってきた。

青年は、尊念の胸ぐらをつかむと、そのまま部屋の外へ尊念を放り出そうとしたが、不思議なことに尊念はびくともしなかった。何度もやっても、びくとも動かないの、すっかり逆上して、青年は、尊念に殴る蹴るの暴行を加えた。

そして、青年は、

「くそ野郎！くそ坊主！」と何度もわめきながら、尊念を殴りつけたが、それでも尊念はまったく動かなかつた。

そんな悶着（もんぢゃく）を、二十分以上続けたので、さすがに青年も疲れ果てて、尊念の前にしゃがみ込んでしまつた。

尊念は、頭から血を流しながら、

「氣は済んだかのう。」と青年に問いかけた。

青年は、相変わらず

「くそ野郎！くそ坊主！」とは言つてはいたが、息も上がり手も腫（は）れ上がつて、もう尊念に襲いかかることはなかつた。

そこで、尊念は、

「無断でそちの部屋に入つて、悪かつたのう。じゃが、よかつたら、わしの話を聞いてもらえぬか?」と青年に問いかけた。

しかし、青年は、息を切らしながら、何も言わなかつた。

そこで、尊念は、次のような説法を始めた。

「そちは、人とは、意味もなく生まれ、また意味もなく死ぬ者であろうと思つておる」と、じやろうが、それは大きな過ちじや。人は、誰しも、自分の魂を磨くために生きておるのじや。その道は、坂道と同じじや。じゃから、辛くて当たり前なのじや。そして、辛さこそ、人の心を磨くのじや。」と。

それに対する青年は、

「くそ坊主! 出で行け!」と大声でどなつた。

それに対する尊念は、

「そちは、わしを『くそ坊主』と思つておるよつじやが、それはそちの心が、『くそ坊主』じゃからじやよ! 他人は、自分の心の鏡なのじや。」と言つた。

これに対する青年は、すっかり逆上し、

「さけんなよー、くそ坊主ー。どうして俺が、くそ坊主なんだよー。」と、どなつちからしながら、尊念の胸ぐらをつかんだ。

これに対しても尊念は、

「外界とは、自分の心の表れなのじや。心の中に醜いものがあれば、外側に醜いものが見え、心の中が澄んでおれば、何事も醜くは見えないものじや。」と語った。

これに対しても青年は、

「醜いものを、醜い、と言つてこらんだよー、あんたの言つてこることば、全く分んねえな！いいから、さつさと出てゆけよー」と、尊念の襟を締め上げながら語った。

これに対して尊念は、

「わしは、そつやすやすと、出てゆくわけにはゆかん。そちの母上に頼まれておるでな。」と、冷ややかに語つた。

それを聞いた青年は、益々逆上し、尊念を部屋の外に引きずり出でさせたが、やつぱり尊念は、動かなかつた。そして、しまいに、尊念の前にじつかりと、腰を下ろし、そして、

「勝手にしろー」と言しながら、尊念に背を向けて、一人、ネット・ゲームをやり始めた。

尊念は、しばらく黙つて彼を見ていたが、彼の技があまりにも巧みなので、「うまいもののじゃな」と、思わずつぶやいた。

青年は、なお、黙々とゲームを続けたが、やはり尊念のことが気になつた。あまりにも、尊念が静かにしているので、後ろを振り向くと、尊念は座禅をしていた。

青年は、ムッとして、

「お坊さん。坐禅だつたら外(ほか)でやつてくれよー」と言つた。

尊念は、おもむろに目を開けると、

「そうじやな。わしの勤めは、説教じゃつたな」と言つた。

それに対しても青年は、

「説教も、他でやつてくれよー」と言つた。

それに対しても尊念は、

「そりはゆかんのじゃ。そちの母親に頼まれておるからのう。」と言つた。

それに対する青年は、

「何度も何度も、母親って言つたなー」と言つた。

これに対する尊念は、

「母親とは、偉大なる存在じや。母親とは、正に、生命の母体なのじや。その母親な  
くして、何者も、この世に生を受ける事は、できないのじや。」と応えた。

それに対する青年は、

「母親なんか、そんなたいそうなもんじやないよ。どうせヨ好きで、おやじヒシした  
から俺が生まれただけのことなのさー」と言つた。

これに対する尊念は、

「そちは、生命を軽視してあるが、生命とは、偉大なる存在じや。生命が、この世に  
誕生すること自体、偉大なる出来事なのじや。」と言つた。

それに対する青年は、

「じゃ。何か？俺も偉大なる存在というわけかい？毎日ヒツヒツヒロヒロしているだ  
けで、何もしないこの俺が、いつたいどこが偉大だと言つんだよー」と叫んだ。

これに対して尊念は、

「人間とは、だれしも偉大なる存在じや。どんなに汚れてによつとも、それはあくまでも表面上のことじや。ちようど川底に、ダイアモンドが落ちたよつなもののじや。」見、その輝きを失つているように見えても、その本質は何も変わらないのじや。」と言つた。

それに対して青年は、

「笑わせてくれるね！お坊さん！俺の心がダイアモンドと言つのかい？この急け者で小心者のこの俺が、ダイアだというのかい？」と言つた。

それに対して尊念は、

「人間だれでも心の奥底に、決して汚れぬ『不動のプライド』を持つておるのじや。その心は、純粹無垢に輝き、決して傷つくことはないのじや。そもそも心さえ磨けば、すぐさま、光り輝くことじやるわ。」と言つた。

それに対して青年は、

「お坊さん。あんた、つげづく變つているね。不動のプライドだって？そんなプライ

「では感じたことはないねー」と言つた。

それに対する尊念は、

「レベルが低い者は、不動のプライドを感じる事はないのじゃ。不動のプライドを感じるために、心のレベルを上げねばならぬのじゃ。」と言つた。

それを聞いた青年は、ムツとしながら、

「じゃ。どうすれば、やの心のレベルをやがて上げる事ができるんだい？」と聞いていた。

それに対する尊念は、

「己(おのれ)の心のレベルを上げるために、まず自分自身を愛せねばならぬ。己を愛する」とは、全ての愛の基本なのじゃ。じゃから、まず、自己を愛しなされ。自己を愛せば、必ず己の心のレベルは上昇するのじゃ。」と答えた。

これに対する青年は、

「自分なんか、愛せる訳が、あるわけないじゃないか？」「みたい、どうすれば、自分を愛せると言つのかい？」と、吐くよのび言つた。

「これに対しても尊念は、

「己を愛することとは、己の身体を愛することなのじや。己の身体を愛せば、やがて身体には生気が漲(みなぎ)り、こつしか、自分を愛し、他人を愛すことができるようになるのじや。」と答えた。

「これに対して青年は、

「お坊さんの言つてこられることは、分からねえなーなんで、自分の身体を愛すると、それが自分や他人への愛に繋(つな)がるわけ?」と訊(き)き返した。

これに対して尊念は、

「そちは氣づいておらんじやうつが、そちの身体とは、こつもそちを支えよつと、黙々と努力をし続けておるのじや。その身体を思ひやり、いたわる」とは、身体に対する慈愛であり、身体は必ずや、そちに応えようとしてくれるのじや。そして、その思いは、生命エネルギーとして、そちの身体に溢(あふ)れ出し、やがてそれは、他人に対する愛や善意という形(かたち)となつて表れるのじや。」と答えた。

それに対して青年は、にがにがしい顔をしながらも、

「じゃ、どうすれば、身体を愛せるわけ? 詳しく教えてくれよー」と言つた。

これに対して尊念は、

「身体を愛するためには、まず、正しい呼吸・正しい食事、それと適度な運動と適切な休憩/休息を取り、常に身体を清潔に保つことが必要じゃ。そして、正しい呼吸とは、喫煙を避け、埃(ほこり)やカビ臭のない場所で、新鮮な空気をゆっくり鼻から吸い込み、鼻または口からゆっくりと息を吐き出すことをいうのじゃ。そして、正しい食事とは、食べる時は十分に咀嚼(そしゃく)し、暴飲暴食を避け、甘い物・アルコール類・肉類を控え、間食をやめることをいうのじゃ。そして、適度な運動とは、激しくもなく、また一日中動かないでもなく、適度に身体を動かすことをいうのじゃ。そして、適切に身体を休ませると、長時間、仕事や勉強を続けるのではなく、時間をおいて身体をリラックスさせ、夜は十一時前に寝ることをいうのじゃ。そして、身体を清潔に保つとは、高温・多湿を避け、毎日のように身体を洗浄し、清潔な衣服をまとつことをいうのじゃ。そして何よりも大切なことは、これらの事柄が守られるように、自分自身を律(つら)し続けることじゃ。つまり、自分の欲望を抑え、身体に対する思い

やつを優先させるのじや。そつすることによつて、やがて身体はエネルギーに満ち、そちも、自然と、他人に優しくなれるとこつものじや。」と答えた。

それに対して青年は、すっかり、うんざりした顔をしながら、

「そんな、うざいことはできないね！それに、なんで、自分の欲望よりも、体に対する思いやりを優先させるわけ？楽しければいいじやん。好き勝手に生きて何がわるい？どうせ人間、最後には死んじやうわけだし。」と応えた。

それに対して尊念は、

「確かにそういう言つ者もある。じやが、その考えは、間違つておる。我々は、いつも試されておるのじや。恵まれた環境で／不幸な環境で、どう行動するのかを、いつも試されておるのじや。確かに、そちの言つてこることは、もつともじや。じやが、それで得られるものは、何も無いのじや。そのよつな一生は、空(むな)しひ一生なのじや。」と答えた。

それに対して青年は、

「じゃ、どうこつ一生が空しくないといづわけ？」と問い合わせた。

それに対しても尊念は、

「空しくない一生とは、自分の心のレベルを高める一生のことじや。自分の心を高めることなしに、空しさを避けることはできないのじや。」と答へた。

それに対しても青年は、

「じゃ。どうすれば自分の心のレベルを高められるわけ?」と質問をした。

それに対しても尊念は、

「人の心は、愛し、又は善意を行い、又は努力をし、又は忍耐をすることで高められるのじや。何も愛さず・善意を行わず・努力もせず・忍耐もしない者は、決して己の心のレベルを高めることはできないのじや。」と答えた。

これを聞いた青年は、ショックを受けた。正に、自分のことを言われているよう思えたからである。青年は、しばらく悽然(あぜん)としたが、我に返ると、一つ質問をした。

「じゃ和尚さん。俺は、具体的に何から始めれば良いのでしょうか?」と。

それに対しても尊念は、

「そうじやな。まず、そちは、自分を愛する」とから始めねばないねのう。」と言つた。

これに対して青年は、

「自分を愛するところ」とは、さつきのあれですか?」と訊き返した。

それに対しても尊念は、

「そうじや。その通りじや。まず、そちは、自分の身体を愛することから始めねばならぬのう。」と言つて、おもむろに立ち上がり、部屋のカーテンと窓を開け放つた。すると、部屋につけた、田の光が射し込み、それと同時に外の涼しい風が部屋の中に入ってきた。青年は、田に照らされた尊念の顔を見て、ハツとした。そこには、尊念にした今までの慘(むい)たらしい仕打ちの跡が残つていた。尊念は、しばらく黙つて立つていたが、おもむろに青年に向かつてこう言つた。

「どうじやな。気持ちよからうつ。自分を愛する」とは、気持ちの良こものなのじや。」

青年は立ち上がり、窓に行くと、久しぶりに自分の部屋の外の風景を見た。もうすっかり秋めいたその庭は、何年かぶりに見る風景のように思えた。そして、その景

色を、思つつきり吸い込むように深呼吸をすると、今まで胸の中に溜まつていたモヤモヤが、一気に出てゆくような気がした。しかし、再び部屋の中に眼をやると、それとは対照的に雑然とした風景が田の中に飛び込んでいた。青年は、自分の部屋の醜（みにく）さに、改めて氣づき、愕然（がくぜん）とした。

それを見た尊念は、

「どうじやな。自然とは、美しいものじやろ。じやが、そちの部屋も、それに劣らず美しくなるものじや。」と言つた。

これに対しても青年は、

「この部屋が、美しくなるのですか？」と訊き返した。

それに対して尊念は、

「そうじやとも。どのように汚れてこようとも、コソコソと続けておれば、最後には綺麗になるものじや。」と答えた。そして、田の前的小さなゴミを拾い集めると、ゴミ箱に入れ始めた。青年は、それを、しばらく見ていたが、やがて、青年も手伝い始めた。それから二人は、協力して掃き掃除と雑巾がけを行い、結局、一時間もしない

ちに、部屋はすっかり綺麗になつてしまつた。それこそ、何年かぶりに見るきれいな部屋であつた。

尊念は、見違えるようになった部屋を前にして、次のように言つた。

「どうじやな。できたであらう。人間は、やればできるものなのじや。」と。

それに対しても青年は、

「そうですね。確かに、そうですね。」と返事をした。

それに対しても尊念は、

「じやが、これからが大変じやぞ。人間といつものば、いわば欲望の塊じや。油断をすると、すぐ身勝手な行動をしてしまう。じやが、いつも、己の《今の行動》を意識しておれば、欲望は、抑えることが出来るじやろう。」と言つた。

これに対して青年は、

「今の行動ですか？」と、不思議そうに応えた。

それに対して尊念は、

「そうじや。今の行動じや。人は、普段、《今》といつもの意識せずに暮らしておる。

じやから、知らず知らずのうちに、田先のことにについつい気をとられがちになるものじや。じやから、どんなに感情的になつても、今の自分の行動に田をやつておれば、やすやすとは、感情に流されることはなくなるものじや。」と答えた。

青年は、たびたび感情的になつては、多くの人を傷つけたことを思に出し、少し、反省しようつと思つた。しかし、次のよつた質問をした。

「でも、感情的になつて失敗してしまつた場合は、どうすればよこのでしょつか?」

それに対しても尊念は、

「そのときは、素直に謝(あやま)ることじや。勇気を持つて謝れば、相手もいつかは許してしてくれることじやうつ。そして、そうすることで、そもそもまた、進歩することができるのじや。人間とは、失敗を繰り返し、螺旋(らせん)状に進歩するものじやからじや。」と答えた。

これを聞いて青年は、にわかに明るさを取り戻した。今まで、自分を責め続けてきたが、やつと、それから少し解放されたような気がしたからである。

そして、青年は、次のように質問をした。

「和尚さん。私は、次に何をすればよいのでしょうか？」と。

それに対する尊念は、

「次は、まず、今後の計画を立てることじや。そのためには、まず、紙と鉛筆を用意し、そこに理想の自分の姿を書いてみるとじや。そして、どのようにすれば、それに近づけるのか？その具体的な手段を書いてみるとじや。そうすれば、そのときからそちは、理想に向かつて一步近づいたことになるのじや。そして何よりも大事なことは、人生には、世俗的なものを求める水平方向とは別に、精神的な高さを求める垂直方向というものがあることを理解する」とじや。自分の理想を水平方向だけでなく、垂直方向、すなわち愛や善意、それと忍耐や努力を実現する方向にも求めるのじや。そうすることによって、そちの人生は、より充実したものになる」とじや。」と答えた。

それを聞いて青年は、笑(え)みを浮かべた。

それを見て取り尊念は、

「そうと決まれば、書は急げじゃ。さつやく、紙と鉛筆を用意なされよ。」と言つた。それを聞いた青年は、さつそく紙と鉛筆を用意し、机に向つて今後の自分について考え始めた。それを見とどけ、尊念は、ゆっくり彼の部屋を後にした。

尊念が、一階に下りて来てみると、応接間の手前に、お母さんがしゃがみこんでいるのが見えた。一階で大声や大きなもの音がしたものだから、すっかり怖じ氣づいて、立てなくなつていたのである。お母さんは、尊念の顔を見ると、大きく泣き崩れ、「すみません。すみません。」と何度も謝つた。

これに対し尊念は、

「心配なさるな。このよひな」とは大したことではないのじゃ。」と言つた。

それでも、お母さんは、ただただ謝り続けるだけであつたが、尊念は、お母さんの傍(かたわら)に立ち、

「わしは、大丈夫じや。心配いらん。今日せ、このへんで失礼をせてもうこますじや。」と言い、袂(たもと)から手ぬぐいを取り出し、頭に巻きつけると、お母さんと、軽く会釈(えしゃく)をして、その場を去つていった。

しかし、お母さんは、その後も、しばらくは、泣き続けるのみであった。

それから、一、二、三日して、尊念がお寺で庭の掃除をしていくと、あの青年の「両親が、お布施と菓子折りを持って訪ねて来た。一人は、尊念に丁寧(ていねい)にお礼を言うと、菓子折りとお布施を尊念に手渡した。尊念は、一人を庫裡(くり)に案内し、お茶を出してもてなした。聞けば、その後、青年は、家の手伝いを少しほはするようになつた」という。

それを聞いた尊念は、

「それは、なによりなことじや。」と応えたが、一人に向かつてこう付け加えた。

「よいかな。大事なのは、これからじやぞ。くれぐれも彼のことを、心配したり憐(あわれん)だりしてはいかん。心配や憐みとは、人を《低く評価する》ことなのじや。そんなことをされては、人は、心を成長させることができんのじや。じやから、決して彼のことを心配したり憐れんだりしてはいかん。彼を高く評価し、信じることこそが、今の彼には必要なのじや。」と。

これに対して、二人は、明るくはつきり、

「はい。」と返事をした。

「これを聞いて尊念は、

「ウン」とうなずき、一人に向かつて笑顔を見せた。

それから、尊念は、ひとときの間、談笑を楽しんだ。それは秋の日の、つかのまの幸せであった。

## 五、自殺願望者との対話

忙しい正月の法要も終わつたある雪の降つた朝、尊念がいつものように雪掻きに庭に出てみると、真新しい雪の上に一筋の足跡が付いていた。不審に思った尊念が、その足跡をたどつて行くと、一本の松の木の枝に、少年がロープを掛けているのが見えた。

それを見て尊念が、

「コラ！」

と大声を出すと、少年は、ビックリしたように尊念の方を振り返り、その拍子に、足もとを滑らせて転倒してしまった。

尊念が、慌ててそこに駆けつけると、少年は、後頭部を強打したらしく、雪の

上で大の字になつてゐた。尊念は、少年の体を抱き起してみたが、少年はもううつりをして全く要領を得なかつた。仕方ないので尊念は、法堂（はつとう）まで少年を抱えて行つた。

法堂に着くと尊念は、まずストーブに火を入れ、布団（ふとん）を引き、少年の濡れた衣服を脱がして、布団の中に少年を横たえた。少年は、特にケガをした様子もなかつたが、転倒のショックで、そのままやすやすと眠りこんでしまつた。尊念は、少年の所持品を調べてみたが、特に身元が分かるようなものはなかつたので、尊念は、少年が目覚めるまではしばらく様子を見るこことした。

それから、小一時間ほど経つた頃、少年は、ようやく目を覚ました。少年は、見知らぬ場所で寝てゐる自分に気がつき、きょとんとしていた。

それを見ていた尊念は、

「どうじや。気がついたかな？」と少年に優しく語りかけた。

少年は、最初、うとうとと目を開けていたが、いきなり目の前におやじの顔が現れたので、ハッと驚きガバッと毛布をめくつて飛び起きた。そして、全裸の自分に気が付

き、更に驚いた。

それを見ていた尊念は、

「悪いが、そちの服は、そいいに干させてもいいだ。下着まで濡れでおっただな。」と言つた。

それを聞いた少年は、よつやく正氣を取り戻し、

「ここは、どこですか?」と、たずねた。

これに対し尊念は、

「ここは、敬足寺の法堂ぢや。」と答えた。

それを聞いた少年は、事の始終を少しずつ思い出した。確か自分は、死のうと思つて、この寺までやつて来て、そして、松の木の枝に、ロープを吊つるそうとしていたら、坊主に怒られ、その拍子に転んだ、ところどころまでは思い出した。

「すると、このおやじが、あの坊主だったかな?」と思つた直後、少年は、慌(あわ)てて飛び起き、

「すみませんでした!」と全裸のままで土下座をした。

それを見ていた尊念は、

「なあに、あやまることはない。じゃが、首吊とは関心しないの。お寺は、死んだ者が行く場所でも、生きている者が逝(ゆ)く場所ではないのじゃ。」と語った。そして、尊念が、少年に甘茶を差し出すと、少年は、それを受け取り、毛布に包(くる)まりながら、それをすすり飲んだ。

それから、尊念は、少年のために、適当な衣服を見つくり、

「わしの、法衣(ほつえ)じゃが、着てみなされ。ないよりは、まじじゃねつ。」と語つて、少年に法衣を差し出した。少年が、それに袖を通してみると、意外にもサイズはピッタリであった。

少年の血色(けつしょく)が良くなってきたのを見た尊念は、「じゃが、なんでも、自殺など図らうとしたのじゃ。」と質問をしてみた。これに対しても少年は、しばらく黙つていたが、おもむろに、「みんなを、見返してやれりとしたのです。」と答えた。

それを聞いた尊念は、

「見返すとは、どういう意味じゃな?」と質問をしてみた。

それに対しても少年は、学校でいじめられることと、それに、親が真剣に向き合つてくれないことを、ポツリポツリと語り始めた。

尊念は、それを聞きながら、終始、うなずいてはいたが、やがて、

「そちの気持ちは、分かるが、じゃが、事の責任を、他人のせいにしてはいかんのう。」と言つた。

これに対しても少年は、

「でもどうすればいいんですか? 学校でいじめられると、地獄ですよ。先生も向き合つてくれないし。」と言つた。

それに対して尊念は、

「人には、誰にでも主体性というものがあるのじゃ。じゃから、どのような環境であつても、常に人は次の行動を自由に選択することができるのじゃ。それができないと思つておるのは、そちの思い込みにしかすぎないのじゃよ。」と答えた。

これに対して少年は、

「でも僕は、学校じゃ、ズボンを脱がされたり、お金を取り戻されたりするんですよ！それでも自分でなんとかできるけど、和尚さんは言つのですか？」と言つた。これに対しても尊念は、

「そちは、先ほど死のうとしたではないか？その気持ちがあれば、何事も成せない事はないはずじゃ。」と答えた。

それに対しても尊念は、

「でも、ズボン脱がされたら、メチャメチャ恥ずかしいですよ！」と言つた。

それに対しても尊念は、

「確かに、その通りじゃ。じゃが、死ぬ気になれば、なんでもできるものじゃ。今度は、一度死ぬ気で立ち向かってみてはどうじや。」と答えた。

それに対しても尊念は、

「でも和尚さん、相手は複数ですよ。無茶苦茶強そうなやつもいるし、とても勝ち田なんかありません！」と答えた。

これに対しても尊念は、

「確かに、そちには、勝ち目はなかろつ。じゃが、そうゆうことに立ち向つてこそ、人生に価値が生まれるのじや。」と答えた。

しかし、少年は、尊念の言つことに全く納得していなかつた。

それを見ていた尊念は、

「よいかな。《人生とは、自らを創造すること》なのじやよ。怖がつていては、何も生まれん。立ち向かつてこそ、価値が生まれるのじや。」と言つた。

それに対しても少年は、

「でも和尚さん、僕には、そんな勇氣はありません。」と言つた。

それに対して尊念は、

「そちは、先ほど死のうとしたではないか。その勇氣さえあれば十分じや。」と答えた。

それに対して少年は、

「でも、和尚さん。人間は、死ねば樂になるのでじょつ。僕は、そんな日々より、死ぬほうがましです。」と応えた。

それに対して尊念は、

「確かに、死ねば楽になるように思える。じゃが、その事によつて人間は、大事なものを失うのじゃ。」と答えた。

これに対しても少年は、

「大事なものとは、なんですか？」と質問をした。

それに対して尊念は、

「大事なものとは、『魂を磨く機会』のことじゃ。」と答えた。

それに対しても少年は、

「魂を磨く機会ですか？」と驚きながら訊き返した。

それに対して尊念は、

「そうじゃ、魂じゃ。人間とは、肉体と魂からできておるといわれておる。そして、その魂は、肉体的な苦痛によつて磨かれるのじゃ。じゃから、死んで肉体を失えば、魂を磨く機会も失われることになるのじゃ。」と答えた。

それに対しても少年は、

「でも、僕は、そこまでして、魂を磨きたいとは思いません。やっぱり、死んだ方が

樂じやなじでしょうか?」と応えた。

それに対し、尊念は、

「確かに、生きる」とは、苦痛じや。じゃが、生きることに耐え続けておると、だんだん忍耐は平気になつてくるものじや。そして、真つ直ぐに耐え続けると、そのうち、はつらつとした気分にやえなつてくるものじや。かよひび、高いヨコ離れて、すがすがしい気分になるよつなものじや。」と答えた。

少年は、尊念の話を不思議そうに聞いてはいたが、

「でも、和尚さん。僕は、いじめられても、ちつとも気持ち良くなんかなりません。」  
と応えた。

それに対して尊念は、

「それは、そちが、苦痛に真つ直ぐに向き合つておらんからじやよ。苦痛に、向き合つて、それを乗り越えてこそ、すがすがしい気持ちになるものじや。」と答えた。

それに対して少年は、

「でも、和尚さん。僕には、そんな苦痛に向き合つての勇気は、とてもありません。」と応

えた。

それに対する尊念は、

「勇気を出すには、まず、『自分を捨てる』ことが大事じゃ。自分を捨てなければ、何事も成すことは出来んじゃわい。」と答えた。

それに対する少年は、

「でも、和尚さん。僕には、自分を捨てる勇気はとてもありません。」と応えた。

これに対する尊念は、

「まず、自分の中の見栄や利口心を全て捨てるのじゃ。やつすれば、出すと恐怖は退(しりぞ)く」といひやいひ。」と答えた。

これに対する少年は、

「でも、和尚さん。見栄や利口心は、どのよつにすれば捨てることができるのでしょうか?」と質問をした。

これに対する尊念は、

「そのためには、まず、自分を愛し、そして、自分を高く評価する」とじゃ。やつす

れば、自ずと見栄や利口心は、退くことじやうべ。」と答えた。

これに對して少年は、

「では、どの様にすれば自分を愛することができるのでしょうか?」と質問をした。

これに對して尊念は、

「そのためには、まず、自分自身を知らねばならぬである。」と答えた。

それに対する少年は、

「では、どの様にすれば、自分自身を知ることができるのでしょうか?」と質問をした。

それに対する尊念は、

「そのためには、まず、自分の耳を塞(ふさ)いでみることじや。自分の耳を塞いでみれば、血の流れる音や鼓動、それに自分の息づかにさえ聞いてくるじやうべ。それは、そちが今、生きておる証拠なのじや。そして、それは、そちの細胞の一つひとつが、懸命に生きておる証(あかし)なのじや。そして、そちの生は、まことに、それらによって、支えられておるのじや。けなばく、そちの生を支える、一つひとつの細胞、元胞(げんぼう)、

そちは、愛と感謝の気持ちを送らねばならぬ。そのように、そちの生は、そちのみで支えられているわけではないことを、まず、そち自身が、理解する必要があるのじや。」と答えた。

これを聞いて少年は、驚いた。今まで、自分の体をそのように考えたことは、一度もなかつたからである。そこで、試しに少年は、自分の耳を塞いでみた。確かに、そこは、様々な生命の活動する音に満ちていた。

そして、

「この音は、確かに、生きている証拠なんだな~。」と思つた。

そして、尊念に対し、次のような質問をしてみた。

「和尚さん。僕は、この先、自信を持つて、生きていいくことができるのでしょうか?」と。

それに対し尊念は、

「もちろんそうじや。じゃが、そのためには、もう一つ、自分を知らねばならぬである。」と答えた。

それを聞いた少年は、

「もう一つの自分とは何ですか？」と、たずねた。

それに対する尊念は、

「もう一つの自分とは、そちの特徴に係わることじゅう。そちには、もちろん両親がおるじゅう。そして、その両親にも、また両親があることじゅう。そのようにして祖先とは、およそ無限のように広がつておるのじゅう。そして、そちは、それら全ての祖先の特徴を継承しておるのじゅう。すなわち、そちとは、全ての祖先の特徴を継承する最高の存在であることを、そち自身、自覚せねばならぬのじゅう。」と答えた。

これに対する少年は、

「でも、僕は、そんなに優れていませんよ。」と応えた。

これに対する尊念は、

「それは、そちが、努力不足じゅうからじゅうよ。確かに、最初から使える能力は限られておるし、時間も限られておる。じゅうから、全てにおいて天才になるわけにはゆかぬが、限られた分野に集中すれば、必ず、優れた能力が現れるはずじゅう。じゅうから、自

分の得意分野に集中して、努力なされよ!」と答えた。

これに対する少年は、

「では、自分の得意分野は、どのようにすれば見つかるのでしょうか?」と、たずねた。

これに対する尊念は、

「そちの得意分野の種といつものは、そちの好きな分野の中に埋まつておるのじや。人間、何かが好きであるということは、その中に、自分の才能の種といつものが、眠つておるということなのじや。じゃから、そちは、自分の好きなことをなされよ。そして、あきらめずに努力をしなされ。そうすれば、やがて必ず芽が出て、成長し、花が咲き、実がなることであらう。」と答えた。

これを聞いた少年は、にわかに喜んだ。自分は、勉強はあまり得意ではないが、絵を描くことだけは、好きだったからである。少年は、すっかり元気を取り戻し、自宅に帰ると言った。

それを聞いた尊念は、

「そうじや、そこに良いことを教えてやるつ。」と言ひ出した。

そして、すくと床の上に立ち上がるど、

「そちに、呼吸法を教えてやるつ。」と言つた。

それを聞いた少年は、

「呼吸法ですか？」と訊き返した。

それに対する尊念は、

「左様、呼吸法じや。現代人は、皆、呼吸を軽視しておるが、呼吸とは、元来食物同様、生きる上で、重要な要素なのじや。」と答えた。

そして、床の上にゆるつと立つと、

「まず、両足を肩幅よりやや狭めに開き、足先を、ほぼ平行にして立つ。次に、足の裏を意識しながら、全身を緩(ゆる)め、足の裏に向かつて大きく息を吐き降ろしながら、ゆつくりしゃがんでゆくのじや。そして、ここまでが、準備運動じや。そして、息を吐き切つたら、両手を下げたまゝ、足の裏から息を吸い上げるようなつもりでゆっくり立ち上がり、意識を、膝(ひざ)・腹部・肛門・背中と移してゆく。そして更

に、意識を背骨に沿ってゆっくり上げてゆき、頭のナシペンまで来たら、そこで軽く息を止めるのじや。そして、しゃらくしたら、意識を身体の前面を通してお腹まで降ろしてゆき、そこでしゃらく息を止めた後、足の裏に向かって、柔らかく口から息を吐いてゆくのじや。そして、九割方まで、息が無くなつたら、ゆっくりと足の裏に向かってしゃがんでゆくのじや。これを、数回繰り返し、最後に全身で息を吸い上げ、その後、しゃがまづてゆつたりと、全身で息を吐き降ろしてゆくのじや。」と言つて、見本を示した。

尊念の動作は、とても緩慢(かんまん)で、まるでスローモーションを見ているかのようであつた。少年は、尊念の動きの遅さに、しばし、あつけことられながら、それを見ていた。

動作を終えた尊念は、

「どうじやな。そちも、やつてみんかな?」と少年に言つた。

それを聞いた少年は、

「いえ、いえ、和尚さん。僕には、とても、そんなまねはできません。」と言つた。

これを聞いた尊念は、

「なにも、最初から長く呼吸をする必要はないのじゃ。呼吸は、五年も続けておれば、自然と長くなるものじゃ。じゃから、最初は、自分のできる範囲で、ゆつたりと呼吸をしておれば、十分なのじゃ。」と答えた。

それを聞いて少年は、おもむろに立ち上ると、尊念の真似をして呼吸をし始めた。それは、今までに経験したことが無いほど、長くてゆつたりとした呼吸であった。そして、それを七回繰り返した後、ゆつくりと息を吸い上げて、そして、ゆつたりと吐き降ろしてゆくと、まるで全身のエネルギーが辺(あたり)に放出されるようにさえ感じられた。

呼吸を終えて尊念は、

「どうじゃな。何か感じたかな?」と少年にたずねた。

これに対しても少年は、

「なにか、背中とか全身とかが熱くなつたような気がします。」と答えた。

それを聞いた尊念は、

「そうじやうひ。呼吸とは、生命エネルギーの源、即ち、気食は同源なのじや。これでそちも、自殺など、もつ考へるじとは、ないじやうひ。」と答えた。それに対しても私は、苦笑しながらそれに応えた。

それを見ていた尊念は、

「よいかな。人は、誰しも、人生を自由に選択することができるのじや。じやから、どこまでも自分を愛し、真直ぐに努力をなされよ。そうすれば、きっと、必ずと道は開けるというものじや。」と少年に語つた。

それを聞いた少年は、力強く、

「ハイ。」と返事をした。

尊念は、彼の服を手に取ると、乾いていることを確認してから、彼に手渡した。少年は、それを受け取ると、さつそく着替え、そして、法衣をたたんで尊念に手渡した。尊念が、それを受取り、土間を渡つて扉を開けると、外には、雪が降つていた。

尊念は、少年に傘を手渡し、

「雪が積もつてあるからのり、階段を降りる時は、気をつけのじやぞ。」と言つた。

少年は、傘を手に取り、申し訳なさそうにお辞儀(じぎ)をすると、雪の中を歩いていった。尊念は、少年を見送ると、いつものように寺の勤めをし始めた。

その後も、雪はしぶしぶと降り続き、やがて、少年の足跡は、見えなくなつていった。

## 六、仁侠人との対話

バレンタインデーが近づいたある日、尊念が法事の帰りに商店街を歩いていると、道の真ん中に人だかりができていた。なにやら一人の男が言い争っているようで、やたら、やかましい怒鳴り声が聞こえていた。尊念は、何一つ気にすることなく、その脇を通り過ぎようとしたが、急に人垣が割れて、一人の男が尊念の足元に転がり込んできた。尊念が、男が転ってきた先に目をやると、一人の大男が物凄い勢いで尊念の方に突進してくるのが見えた。男は、尊念の足元に転がる男を掴(つか)み起し、「返せねえって、言うのか！コノヤロウ！」と言つて、男に向かつて拳(こぶし)を構えた。

尊念は、すかさず、

「暴力は、いかんぞ！」と、男を諫(いさ)めたが、それに対して男は、大声で、

「坊主は、黙つていろ！」と言つた。それでも、尊念は、男の腕を制そつとしたので、それに、すつかり逆上した男は、尊念に掴(つか)みかかり、その拍子にもう一人の男は、地面に尻餅をついた。そして、これ幸いとばかりに、よつんばいになり、一目散に人垣の中に駆け込んでいった。男が、それに気付いて振り向いた時には、時すでに遅く、その男の姿は、もう、ほとんど見えなくなっていた。

男は、

「とんだ邪魔をしてくれたな！坊主！」と言つと、尊念を突き飛ばした。

そして、男は、ものすごい形相(きょうそう)で尊念をにらみ続けたが、尊念は、平然と男の瞳を見つめ続けた。そんなにらみ合ひが、かれこれ一分ほど続いた後、男は、

「やめじや！やめじや！ 坊主、いじめても、しゃへないしな～。」と言い出し、ぐるりと向きを変えると、両手をポケットに入れて、人垣を押しのけるように歩き出した。

ほどなくして、辺(あた)りは、平静を取り戻し、皆、思い思いの方向に歩き出した。尊念もまた、襟を正すと、また帰路を歩み始めた。

一、三十メートルほど歩きだした時、後ろから尊念を呼び止める大声が聞こえてきた。振り返ると、声の主は、先ほどの大男であった。

男は、

「オイ。待てよー坊さん！」と言つて尊念を呼び止めて、

そして、

「あんた、悪いが、ちょっと、この先、付き合つてくんねえかな？」と言つた。

尊念が、訳を尋(たず)ねると、男は、

「すっかりしらけちまつたから、ちょっと、飲み直そつと思つてよ。」と答えた。

尊念が、当然のように断ると、男は、

「まあ、まあ、まあ」と言つて、尊念の袂(たもと)を掴(つか)んで、歩き出した。尊

念は、袂が裂けてはかなわぬと思い、そこは、そのまま男の後について行った。

五分ほど歩くと、尊念と男は、とあるビルの十階にある高級クラブの前に辿(たど)

り着いた。

扉を開けると、

「いらっしゃいませ。」と體(つら)ひほい声がして、奥からママさんがあわやかに出てきた。

そして男を見るなり、

「あら、マサさん。お久しぶり。」と言つて、色っぽく男にからだを寄せてきた。

そして、ママさんは、尊念に気づくと、冷静に、

「あら、珍しい！お連れさん。」と言つて、尊念に微笑みかけた。

尊念は、ママさんで軽く会釈をすると、その場を立ち去つたが、すかさず男は、尊念の袂を持ち、

「まあ、まあ、まあ。」と言しながら、尊念を店の奥のシートに引っ張り込んだ。

そして、男は、シートに座り、すっかりリラックスした様子となつた。そして、間もなくボトルが用意され、二人の女性が、尊念と男の両端についた。

男は、女の肩に腕を回し、左手でグラスを持ちながら、

「あんた、さつきは、いい目をしてたよ。」と言い、グラスに注がれたブランデーを、一気に飲み干した。

尊念は、一切の物に手を付けようとしなかつたので、

それを見ていたホステスは、

「あら、お坊様、御飲みにならないですか？」と、たずねた。

これに対しても尊念は、

「わしや、結構じゃ！」と軽く応えた。

それを聞いたもう一人の若いホステスは、

「お坊様つて、ストイックなんですね。」と明るく応えた。

一人のホステスは、何とか場を盛り上げようとしたが、尊念は、全くそれに動じなかつた。

それを見ていた男は、

「悪いが、席を外してくれねえかな？ ちよいと、お坊さんと話がしたいんでね。」と言つた。

それを聞いた若いホステスは、

「あ～、お坊様を独り占めなんてずる～い。」と言つた。

これを聞いて、男の動きが一瞬止まり、それを見ていた、もう一人のホステスは、すかさず若いホステスの手を引いて、そそくさとその場を後にした。

ほどなくして軽躁(けいそう)さが去り、辺りには心地よい音楽が流れ出した。男は、グラスを手に取り、それをゆっくり眺めては、なかなか話を切り出さなかつた。

それを見ていた尊念は、

「用がなければ、帰らせてもらひや。」と言つた。

それを聞いた男は、

「まあ、そつ言わずに、ゆつくりしていけよ。」と言つて尊念を引き止めた。それでも

尊念は、席を立とつとしたので、

男は、

「ちよいと待ちなよーあんたには、まだ話があるんだよー」と言つて、尊念の袈裟(けわ)を引つ張つた。

尊念は、ソリしつとシートに座ると、

「とにかく、話とは、なんじや。」と呟き返した。

それに対してもは、

「さつき、あんたに眼付けられた時、不思議と威圧感を感じたんだが、あれはいつた  
い何なんだい？」と問いただした。

それに対してもは、

「それは、そち自身のことじやよ。世界とは、映し鏡のようなものじや。そちは、わ  
しの中にそち自身を見たのじやよ。」と答えた。

それに対してもは、

「フツ」と鼻で息をしながら、一ヒルに笑い、

「笑わせてくれるね、お坊さん。俺が見たのは、おれ自身だと語つのかい？」と言つ  
た。

それに対してもは、

「その通りじや。そちは、わしの中にそちを見たのじや。」と答えた。

それを聞いた男は、高らかに笑い、

「おら、あんたが気に入つたよ。」と言つて、またグラスを飲み干した。

そして、

「でもよつ。他(ほか)のやつじや、そんなものを感じないのは、どういう訳だい?」

と訊き返した。

これに対し尊念は、

「それは、その相手が、純真でなかつたからじやよ。およそ人間以外の万物は、純真そのものなのじや。じやから、自分の姿を、そのまま相手の中に見るものなのじやよ。」と答えた。

これを聞いた男は、膝をたたいて笑い出し、

「おら、あんたが益々気に入つたよ。」と言いながら大笑いをした。

そして、

「おら、永い」と、じぢぢの世界も見てきたが、あんたみたいな人間は、初めてだよ!」と笑いながら言つた。

尊念にとつては特におかしな話ではなかつたので、尊念は、男が笑い終わるまで黙つていた。

そして、

「訊きたいのは、それだけかな?」と、たずねた。

男は、目に手をやり、

「あ〜、久しぶりに笑つたよ。」と言いながら、

「でも、まだ訊きたいことは、あるんだよ。」と言つて尊念を引き止めた。

そして、

「とにかく、あんた、そんだけつた的な説法、どこで身に付けたんだい?」と、たずねた。

それに対する尊念は、

「これは、誰に聞いたわけでもないのじゃ。自然に習得したものなのじゃよ。」と答えた。

それに対する男は、

「じゃ、どうすれば、それは、自然に習得できるんだい？」と、たずねた。

これに対して尊念は、

「まず大事なことは、毎日を誠実に生きるじとじや。そして自分と自然を愛するじとじや。そうすれば、自(おの)ずと自然の道理は見えてくるものじや。」と答えた。

それを聞いた男は、また鼻で笑いながら、

「誠実ねえ？誠実とは、そんなにたいそうなものかねえ。」と応えた。

それに対して尊念は、

「誠実とは、絶対人を裏切らないことなのじや。誠実によつて、人は、人(：他人と自分)の心の内に愛を奏(かな)でるじができるのじや。」と答えた。

それを聞いて男は、また鼻で笑つて、

「あんた、意外とロマンチストだね。だが、あんたの言つじとは、ちつとは分かるよ。しつちの世界も、誠実とは、絶対裏切らないことだからな。」と言つと、またグラスを口にした。

尊念は、男の中に意外な純真さを見ていた。元より《悪とは妄想に過ぎない》と思つ

ていたので、両極端は必ず似てゐるはずじゃと、確信をしていた。

それで、

「そちは、そちの人生をどのように見ておるのかのう?」と訊いてみた。

それに対して男は、

「そうか!人生と来たか!人生?人生?ん~、俺の人生とは、まあ、ちっぽけなものだな。」と応えた。

それに対して尊念は、

「そちは、人生とは、捧げる」とじやと、感じておるはずじや。何に人生を捧げるかで、人生の価値は決まるのじや。そちは、いつたい今、何に人生を捧げようとしておるのかのう?」と、たずねた。

それに対して男は、しばらく黙つていたが、グラスを口にすると、

「そうだな。極道そのものかな?」と答えた。

その後、しばらく沈黙が続いたが、尊念は、おもむろに、

「両極端は、似ておるはずじや。じゃから、そちも精進を重ねねば、自(おの)ずっと道

は開ける」とじやる。」と応えた。

これに対して男は、

「じゃ、どのように精進すれば、道が開けるんだい？」と尊念に質問をした。

これに対して尊念は、

「まず自分を愛することじや。そして、ひたすら人に恩くす」とじや。」と答えた。

これに対して男は、また鼻で笑つて、

「そりや無理だねー和尚さん。俺は、到底自分を愛せない。」と言つた。

これに対して尊念は、

「自分とは、記憶しているといふの者なのじや。じゃから、過去の自分は忘れて、これから自分の自分を愛しなされー。」と言つた。

これに対して男は、

「俺は、到底過去の自分を忘れるとはできない。忘れる訳にはいかないんだ。」と言つた。

それに対して尊念は、

「自分を許すのじゃ。自分を許せば、過去の縛りから解放されることは、じや らい。」と言つた。

これに對して男は、  
「俺は、自分を絶対許す訳にはいかねんだ！」と怒鳴りながら両手で激しくテーブルを叩いた。

これに對して、周りの客は、一斉にこちらを振り返り、その後、一瞬の静寂が漂つた。  
尊念は、しばらく黙つていたが、男が落ち着くのを見とどけると、おもむろに、「  
「全てを捨てなされ！全てを捨てて最高の善意を実践なされよ！それが、およそ人の  
為しうる最高のヨーガ（心の道）なのじや。」と応えた。

それに対して男は、荒い息を抑えると、

「あんた、いいことを言つね。所詮、極道とは、罪滅ぼしなのかもしけねえな！」と  
言つた。

しかし、男は、

「だが、和尚さん。俺は、この世界にしか生きてはいけねえ。」と答えた。

それに対しても尊念は、

「人がどのように生きるかは、その人の判断に委ねられてあるのじゃ。じゃから、そちは、そちの信じる道を歩まれよ。」と答えた。

それに対して男は、

「ああ、そうさせてもらひや。」と言つと、氣を取り直して、またグラスを口にした。そして後ろを振り向き指を鳴らすと、すぐさま一人のホステスが駆け寄つて來た。男は、女を両脇に抱え、終始満悦であったが、酔いが回つたのかそのうち寝入つてしまつた。尊念は、男が寝入るのを見届けると静かに席を立ち、料金を払つて店を後にした。そして、寺に着いた時には十一時を回つていた。

翌朝、尊念は、いつもの通りに寺の勤めを行つた。夜明け前、尊念は、凍える手で庭掃除をしながら昨日の出来事を振り返つていた。確かに、過去の業(いのつ)を解消するには、《愛》以外には、最高の善意の実践しかなさそうである。しかし、極道の世界でそれを行えば、命と引き替えになるかもしれない。尊念は、退路の無い人生を歩む男の姿に胸を痛めた。見上げれば、いつしか東の空は白み始め、境内(けいだい)には、

梅の花が咲いているのが見えた。

## 七、未婚女性との対話

ひな祭りが過ぎたある日、尊念は、とあるホテルのラウンジに来ていた。と言つのも、ある檀家の御婦人に、彼女の娘さんと呂うように頼まれたからである。

待ち合わせ時間を過ぎること三十分、ようやく、一人の娘さんがラウンジに現れた。年このろでは三十過ぎで、すらりとした美形のお嬢さんであつた。娘さんは、尊念に一礼をすると尊念の向いの席に座つた。尊念は、娘さんに何か注文するように促し、それに対し、娘さんはレモンティを頼んだ。

程なくして注文の品が届くと、尊念は、

「今日は、せつかくの休日に来てもらひて申し訳ない。そもそも聞いてお呂うが、そち

の母上からそちの身の上相談に乗つて欲しいといつてじやつたので、いつして、「足労願つたわけじや。」と言つた。

しかし、娘さんは、特に話す事は何も無いこといわんばかりに、うつむくだけであった。

そこで、尊念は、

「何か、悩み事でも、お在りですかな?」と訊(き)いてみた。

しかし、娘さんは、相変わらず、うつむくばかりで返事をしなかつた。

仕方がないので尊念は、

「会社はどうじやな。」と訊いてみたが、

娘さんは、

「ええ、まあ。」と言つものの、それ以上話は進まなかつた。

娘さんの母親からは、娘が、お見合いを断つてばかりいるので、何とかして欲しいとの依頼であつたが、尊念にとつても若い女性を相手にするのは苦手であった。

そこで、尊念は、ある男性の話をしてみた。

「昔、わしの古い友人に純粹な奴があつてな、その男が、ある日、とある所の娘さん

に恋をしたそつじや。最初は、片思いであつたが、そのうち両思いとなり、じやが、何年経つても通り一辺倒の挨拶以上には、関係が進まなかつたそつじや。じやが、男は、それでも彼女を一生愛する決意をしたそつじや。そちば、そのような男性をどのように思つのかのう?」と、娘さんに訊いてみた。

それに対する娘さんは、少し考えた後、

「その人は、バカだと思います。世の中に、女性は、沢山(たくさん)いるのに、一生を棒に振るなんて、その人は、きっと、バカだと思います。」と言つた。

それに対する尊念は、

「では、相手の女性については、じひ思つのかのう?」と訊いてみた。

それに対する娘さんは、

「その人も、バカだと思います。」と答えた。

それに対する尊念が、

「それは、なぜかな?」と訊いてみると、

娘さんは、

「両思いなのに、そのままでいるなんて、二人とも、バカだと思います。どんな事情があるかは知りませんが、思い切って相手の胸に飛び込んで行つた方が良いと思います。」と答えた。

それを聞いた尊念は、

「もし、そちが、その男の恋人であつたならば、そちは、勇気を持つてその男の胸に飛び込んでいけるのかのう？」と訊いてみた。

それに対しても娘さんは、

「たぶん、私は、できないと思います。」と答えた。

それに対して尊念は、

「そちは、なぜ、それが、できんのかのう？」と訊いてみた。

それに対して娘さんは、

「私には、自信がありません。」と答えた。

それに対して尊念は、

「それは、いつたい、何に対する自信なのじゃ？」と訊いてみた。

それに対しても娘さんは、かなりバツを悪そつにしながら、顔を赤らめ、

「それは、SEXに対する自信です。」と答えた。

尊念は、これ以上聞いては女性に失礼かと思ったが、ここは心を鬼にして更に質問をした。

「それは、どのような点で自信がないのかのう?」と。

それに対して娘さんは、しばらく黙つた後、

「その、男の方に身体を見られるのは、恥ずかしいことです。それに、SEXの時に、氣に入つてもらえるかどうか知らないし、それに。。」と言つたところで口を閉ざした。

それに対して尊念は、

「それに、なんじゃな?」と、たずねてみた。

それに対して娘さんは、

「それに、良い子が生まれるかどうか知らないし、自分が、良い母親になられるかどうかも分かりません。」と答えた。

それに対しても尊念は、

「そちは、愛について、少し、誤解をしておるよつじや。愛とは、永遠・無限なるものなのじや。じゃから、そちの思つておるよつなことば、心配するに当たらないのじや。」と答えた。

それに対しても娘さんは、尊念の答えに戸惑いながらも、疑念の思ひで、「無限の愛など、本当に、あるのでしょつか？」と訊き返した。

それに対しても尊念は、

「確かに、人は、出会いと別れを繰り返す。じゃが、本当に愛は、永遠・無限のものなのじや。じゃから、本当に愛する想いを持つ者の想いは、決して消えることはないものじや。」と答えた。

それに対しても娘さんは、

「愛する想いも、死んでしまっては終わりではないのでしょつか？」と訊き返した。

これに対しても尊念は、

「確かに、そのようにも思える。じゃが、永遠に思つ心は、決して消えたりはせぬも

のじや。少なくとも、やちの心かいは、消えたりはせぬ」とじやひひ。」と答えた。

それに対する娘さんは、

「でも、和尚さん。そのように思つ方は、稀(まれ)にしかなこのではなこのでしょ  
うか?私は、そのような男性に、元にかかったことはありますよ。」と答えた。

それに対する尊念は、

「確かに、そのような男性は、稀じや。じやが、男性とこつものは、本来誰しもその  
胸に、黄金のハートを宿しておるのじや。じやが、たいがいの男性は、世間の欲情に  
流れされ、それに気がついておひとのじや。」と答えた。

それに対する娘さんは、

「では、男性が、自分のハートに気が付くためには、何が必要なのでしょうか?」と、  
たずねた。

それに対する尊念は、

「それには、禁欲が必要じやひひ。禁欲によって男性は、己の中の本当の愛に気が付き  
始める」とじやひひ。」と答えた。

それに対しても娘さんは、「では、どのよつにすれば、そのよつな男性と巡つべつにじができるのじょつか?」と、たずねた。

これに対しても尊念は、

「そのためには、まず、自分を磨くことじや。そして、血のレベルを高めていくのじや。高に山に登れば見通しが良くなるよつて、やうすれば、そもそもまた、理想の男性を見渡せることじやわい。」と答えた。

それに対して娘さんは、

「では、どのよつにすれば、自分を磨くことができるのじょつか?」と質問をした。  
それに対して尊念は、

「その為には、まず、自分を愛することじや。自分を愛すれば、自分は必ず輝き始める。そしたら、ひたすら、人のために磨くすのじや。やうするじで、人は、自分の心のレベルを、上げていいくことができるのじや。」と答えた。

それに対して娘さんは、

「でも、私は、自分をそれほど愛することはできないと思います。それに、私は、そ  
んなに美人じゃないし・・・」と応えた。

それに対する尊念は、

「美人とは、作られるものじゃ。人は、美人と思うことで、美人となり、美人と思わ  
ないことで、美人でなくなるのじゃ。じゃから、まず自分が美人でないと『思わない  
こと』が肝腎なのじゃ。」と答えた。

それを見て娘さんに、少し笑顔が戻ってきた。

それを見て娘さんは、

「とにかく、自分を愛しなされ。自分を愛すこと」これが、全ての愛の基礎なのじゃ。」  
と答えた。

それに対する娘さんは、

「母性愛についてもそうですか？」と質問をしてみた。

それに対する尊念は、

「左様、母性愛についてもそうじゃ。自分を愛さない者は、他人も愛さないものじゃ。」

じやから、母性愛を發揮するためには、まず、自分を愛することが必要なのじや。」と答えた。

それに対する娘さんは、

「でも、どのよつにすれば自分を愛することができるのでしょうか?」と質問をした。

それに対する尊念は、

「まず、自分の身体を、十分いたわることじや。そして、正しく食生活や運動をすることじや。そうすることによって身体は、美しく輝き出すことじやわい。」と答えた。それを聞いた娘さんは、少し納得した様子ではあつたが、

それでも娘さんは、

「でも、和尚さん。私は、まだ結婚する自信が持てません。」と応えた。

それに対する尊念は、

「人生の目的は、内なる愛を発現することとも言われてある。じやから、臆することなく、どこまでも、自分の愛を拡げていきなされ。そして、愛に生きてこそ、女性は幸福なのじや。」と答えた。

これを聞いて娘さんは、嬉しくなった。

しかし、すぐに冷静を取り戻し、

「でも、私は、障害のある赤ちゃんが生まれては困ります。」と応えた。

それに対する尊念は、

「障害とは、魂を磨く上で、単なる制約にしか過ぎないのじゃ。じゃから、そのことに気が付けば、障害を持った子供であろうとも、自らの人生を悔(く)いたりはせぬことじやろ?」と答えた。

それでも、娘さんは、納得しきれず、次のように質問をした。

「でも、もしかしたら、子供も授からないかもしません。それでも、私を愛してくれる人は、いるのでしょうか?」と。

これに対する尊念は、

「本当にそちを愛する者は、そちの細胞の一つ一つまでをも、永遠に愛するものじゃ。じゃから、たとえ、子供を授からなかつたとしても、そちを永遠に愛する思いに変わりはない」とじやろ?」と答えた。

それを聞いて、娘さんの表情は、だいぶ和(なご)んだが、それでも、さうなく割り切れない思いが影を落としていた。

それを見て取った尊念は、

「そうじや、そこに素敵な詩を、プレゼントしよう。これは、太陽と花の美しい会話じや。これを聽けば、そもそも本当の愛とは何かを、知ることができるじやねん。」と言つて、次のように、詩(うた)を詠(よ)み始めた。

「 太陽は、言つた。

『 おお、花よ。お前は、なぜそんなに美しい。

可憐(かれん)な花びら、細い茎、生き生きとした葉、深い根。

どれをとっても美しい。』

花は、言つた。

『ああ、貴(とひと)き方。私は、貴方に愛され、貴方の愛に満ちています。

私の花びら、私の茎、私の葉、私の根。

私の総てが、貴方の愛に満たされ輝いています。

私の輝きは、貴方の愛の輝きなのです。』

太陽は、言った。

『おお、いとしい花よ。私は、貴方に一層愛を『えよ』。』

花は、言った。

『ああ、いとしい方。私は、益々貴方の愛に輝きます。』と。

これを聞いて娘さんは、笑顔となつた。

それを見て取つた尊念は、

「どうじや。素敵な詩じやうひ。愛とは、このよひに美しいものなのじや。」と応えた。

これに対して娘さんは、

「私はもうすこしひ、勇気を持って、もうすこしひ、素直に生きたい」と思っています。」と言つた。

これを聞いた尊念は、

「そうじや。そのとおりじや。まこと、女性は素晴らしい。素晴らしい人生、素晴らしい生の可能性は、女性が握つてあるのじや。無限の愛を発現し、その愛を、彼と共に無限に子孫の中に拡げてゆくのじや。そして、それは、過去から未来へと続く人類の無限の生（無限のチューーン）に対する貢献なのじや。」と答えた。

これを聞いた娘さんは、顔を赤らめ、

「ハイ。」と応えた。

そして、時計を見ると、時刻は、午後四時半を回っていた。

尊念は、あまり娘さんを引き止めてはいけないと想い、

「わしの話は、ここまでじや。」と言つて自分の話を切り上げた。

それに対して娘さんは、

「本日は、有意義なお話を聴かせて頂き、ありがとうございました。」とお礼を述べ、

そして、立ち上がると、深々と礼をして、その場を去つていった。尊念は、夕日に美しく映えた娘さんの後姿を見届けながら、ゆっくりとソファに腰を下ろした。そして、窓から入る明るい日射しを見つめながら、しばし、落ち着いた雰囲気を楽しんだ。

それから丁度(ちょいび)一年程経つたある日。お寺に、あの娘さんのお母さんが訪ねて来た。聞けば娘さんの婚礼の日取りが決まったとのことであった。尊念は、この一年間の娘さんの心の成長を想像してみた。そして彼女の幸せを心より祝福した。辺りはまだ寒々とした風景であったが、尊念は、娘さんの晴れ姿を思い、近づく春の訪れを感じていた。

## 八、老婆との対話

桜の便りが聞かれるようになつた頃、尊念は、とある病院に来ていた。そこには、旧知の檀家の方が、入院していると聞いたからである。

病室に入ると、見覚えのある老婆が、窓際のベッドに横たわつていた。尊念が、ベッド越しに覗(のぞ)き込んでみると、その老婆は、すっかり寝入つている様子であつた。そこで、尊念は、老婆が目覚めるのを、しばらく待つことにした。しかし、老婆は、いつこうに目覚める気配がなかつたので、尊念は、簡単な置手紙をしたため、そつと老婆の枕元に置いた。そして、その場を去つとして向きを変えたその直後、肩越しに、「

「和尚さんかね?」と尊念を呼ぶ声が聞こえた。

尊念が、振り返つてみると、老婆は、点滴の刺さった手を尊念の方に差し伸ばしていた。

尊念は、すかさず、老婆の手を取り、

「そうじや。わしじや。久しふりじやの、」と言しながら、老婆に顔を近づけた。

それに対し老婆は、か細い声で、

「和尚さん。わしゃ、もう、だめじや。」と言つた。

それに対し尊念は、

「そんなことはない。きっと、良くなる。」と言つて、励ました。

それに対し老婆は、

「そんなことはない。和尚さん。自分のことは、よつ分かるんじや。」と言つた。

尊念は、お婆さんの詳しい病状を聞いてはいなかつたが、確かにかなり悪そうに見えた。しかし、絶望する」とは、身体に良くないことだと知っていたので、尊念は、反対のことを言い続けた。

「諦めてはいかん。まだ、これからじやる。」と。

しかし、老婆は、

「わしや、もう、十分生きた。もう、思い残すことはない。」と言つた。

それを聞いた尊念は、

「いや、まだ、やる事はあるはずじや。諦めてはいかん。」と言つた。

これに対しても老婆は、

「わしや、もうやる」とはない。やれる事は、もう、ないんじや。」と応えた。

それに対しても尊念は、

「その様なことを言つてはいかん。生き切ることこそ、大切なのじや。」と答えた。

それに対して老婆は、

「わしや、もう、何をする氣力も残つとらん。思い残すことも、何もないのじや。」と

言つた。

それに対しても尊念は、

「今は、身体を治すことが大切なのじや。」と応えた。

それに対して老婆は、

「わしの身体が、もつ治らんのは、もつ判つておる。もつ、ヨウモナリとのじや。」と言つた。

それに対しても尊念は、

「思いは、いつか、通じるものじや。じゃから、治らんと思つてはいかん。」と答えた。  
それに対しても老婆は、しばらく黙つていたが、そのうち、クルリと尊念に背を向ける  
と、

「和尚さん。悪いが、今日は、もつ、帰つてくれんか。」と言つた。

それに対して尊念は、一瞬考えたが、

「そうか、分かつた。それでは、また来るでな。」と言つて、静かに病室を後にした。  
それから一週間ほど経つたある日、尊念が、再び病室を訪れてみると、お婆さんの  
容態は、さらに悪くなつていた。尊念は、ベッドの傍(かたわ)りに腰掛け、お婆さん  
が気が付くのを待つていた。

それから三十分ほど待つて、お婆さんは、やつと目を開けた。  
そして、傍らにいる尊念に気付いて、お婆さんは、

「和尚さん。また、来てくれたのかのう?」と言つた。

それに対しても尊念は、

「そうじゃ。」と短く応えた。

それに対しても老婆は、

「和尚さん。わしゃ、じょじょ立ち行かなくなつてしまつた。わしが、死んだら、和尚さんのお寺に埋めてもらひえんかのう。」と言つた。

これに対しても尊念は、

「何を言つ。まだまだじやうひ。」と言つた。しかし、あまりにも病状が良くない」とは、尊念にも分かつていた。

そして、一人は、しばらく沈黙を続けたが、おもむろにお婆さんは、「なあ、和尚さん。人は、死んだらどうなるのかのう。わしゃ、仏の世界に行けるのじやろうか?」と、尊念に問い合わせた。

それに対しても尊念は、

「そうじやのう。それは、人、それぞれじやからなのう。」と答えた。

それに対しても老婆は、

「わしや、やつぱり、だめかのう。悪いこともたんとやつた。やはつ地獄に行くしかないのかのう。」と言つた。

それに対しても尊念は、

「そちは、地獄に行くことはないと思つた。地獄に行くのは、地獄が好きな奴だけなのじや。」と答えた。

それに対しても老婆は、

「それじや、わしは、仏の世界に行くのかのう。それとも、神の世界に行くのかのう？」と問いただした。

それに対しても尊念は、

「人は、思い描いた世界に行くものじや。仏を思えば、仏の世界に行く。神を思えば、神の世界に行くのじや。」と言つた。

それに対しても老婆は、

「じや、わしは、仏の世界かのう。わしや、觀音様の上品なお姿が大好きなのじや。」

と応えた。

それに対しても尊念は、

「そうじや。愛する思ひこみ、いつか成し遂げられるものじや。その様に思つておれば、  
観音様にもお会いすることができるじや。いい。」と答えた。

それに対して老婆は、

「和尚さん。わしゃ、その言葉を聞いて安心した。」と言ひ、尊念の片手にそつと手を  
置いた。

尊念も、老婆さんの手の上にそつと手を重ね、

「そうじや。愛する思ひこみ、最後まで持ち続けることが大事なのじや。やつする」と  
が、この世に生れた者の、最期の幸せなのじや。」と答えた。

それを聞いた老婆は、尊念の手をギュッと握りしめ、

「わしゃ、最後に和尚さんに会えて、幸せ者じや。」と語つて、涙を流した。

尊念もまた涙を流して、しつかりと老婆さんの手を握りしめた。

そして、病室の窓から、太陽が、ゆっくりと西に沈んでゆくのが見えた。そして、

その赤い光は、最後の最後まで一人の手をそっと照らし続けていた。

それから一週間後、尊念が、再び病室を訪ねた時には、お婆さんの意識は、既になかつた。

しかし、尊念は、左手をお婆さんの額の上にかざし、心の中で次のよつよつがやいた。  
「お婆さんや、よく聞いておくれ。

もしかすると、そちには、死というものが近づいておるやもしれん。

じやが、それを恐れてはいかんのじや。できる限り、心を落ち着かせて、  
のんびりとした状態に心を保つのじや。

じやが、死は、恐ろしい形相(きよしきづ)で、そちに迫つて来るやもしれん。

じやが、それでも、そちは、何も恐れぬことほ無(む)いのじや。

その昔、アキレスが亀に追いつけなかつたよつ。

死は、決してそちを追い越すことはできないのじや。

じやから、どうか、心を穏やかにして、これからわしの話をことを、よつ聞いて欲  
しい。

・・・・

人は、死ぬと様々な世界に生まれ変わるといわれておる。

ある者は、人間となり、ある者は、動物となり、また、ある者は、仏の世界に生まれるといふ。

じやが、これらを超えた世界に生まれることが、本当の生の目標であるといわれておる。

そこは、永遠・不变の愛の世界じや。

その為には、心の中心に愛を置き、その愛をどこまでも広げていくのじや。

そして、『私は、永遠に愛する。』という気持ちを、強く強く持ち続けなされ！

人は、自分にふさわしい世界に生まれる。

永遠に愛する者は、永遠に愛する世界に生まれるのじや。

じやから、永遠に愛する気持ちを、強く持ち続けなされ！

そうすれば、そちは、永遠の愛の世界に、生まれることになることじやう。』と。

そして、そのように念じ終えると尊慈は、お婆さんの寝顔をそつと見つめた。そして、

軽く礼をすると、静かに病室を後にしてた。

それから一週間ほど経つたある日、市役所からお婆さんが亡くなつた旨の連絡があつた。尊念は、斎場(さいじょう)に赴(おもむ)き、遺体と対面すると、棺(ひつぎ)の中のお婆さんに花をたむけた。そして、荼毘(だび)にふしている間も、熱心に祈祷(きとう)を続けた。

それから、遺骨は、遺言により、敬足寺に葬られることになつた。尊念は、遺骨を寺に持ち帰ると、お婆さんのために位牌(いはい)を作つた。そして四十九日間、熱心に祈祷を続けた。

その後、お婆さんがどのようになつたかは、尊念は、知る由(よし)もなかつた。それでも、尊念は、お婆さんの幸福を願い続けた。

さくらの季節はとつて過ぎ、辺りは新緑のみどりに包まれていた。

## 九、経営者との対話

梅雨も終わらうとしているある日、尊念が、法事の帰りに下町を歩いていると、窓越しに、

「和尚さん！和尚さん！」と、呼びとめる声が聞こえてきた。

尊念がそちらの方を振り向くと、顔なじみの男性が、工場の窓より手招きをしていた。尊念が、

「いやー、社長さん、お久しぶりじゃの？。」と叫んだ。

その男は、

「和尚さん。この霪雨の中、そんな所を歩いていては体に毒いや。はよ、いらっしゃへ来て、休まれよー」と言った。

見れば、確かに衣は濡れてはいたが、さほどのことでもなかったので、尊念は、社長さんのお誘いを断つた。

それに対する社長さんは、

「まあ、そう言わずに、寄つていきなされ。それに、相談したいこともありますのじや。」と言つた。

人の悩みと聞いては断れないたちであつたので、尊念は、少しソリに寄つていくことにした。

誘われるままに工場の奥へと歩いて行くと、窓ぎわの一角に小さな事務所があつた。そこに尊念は招かれると、まもなく、暖かい飲み物が用意された。

社長さんは、

「いや〜、お忙しいところ呼び止めてしまつて、すまんかつたですな。実は、和尚さんと相談したいというのは、会社のことなんですね。見たとおり、うちは、ちっぽけな町工場です。もう少し大きくしたいと思っていましたが、なかなかそうもゆかず、今まで来てしました。わしも、いよいよ、よい年になつたので、そろそろ引退

することも考えておりますが、しかし、跡継ぎもおらず、かと言つて、会社をたたむわけにもゆかず、はなはだ困つておりますのじや。なにか和尚さんに良いお知恵がありましたら、賜(たまわ)りたいのですか?」と言つた。

それに対する尊念は、

「見たところ、従業員も一、三十人はあるようじやし、中には良い社員もあるのではないのかのう?」と、たずねてみた。

それに対する社長さんは、

「ここにある従業員の大半は、わしと同じぐらいの年配で、残りも、新米同様の社員ばかりです。だから、わしの後を継げるような者は、一人もおりません。」と答えた。それに対する尊念は、

「社長さん。人とは、育てていくものじやぞ。どんなに出来が悪そうに見えても、人は、育つものじや。育てもしないうちに、そのように諦(あきら)めてしまつては、いかんのう。」と言つた。

それに対する社長さんは、

「でも、和尚さん。経営者になるためには、並の技量では、立ち行かんのです。うちは若い衆は、皆、その器ではありません。」と言った。

それに対する尊念は、

「確かに、人には、向き不向きというものはある。じゃが、人には意外な才能というものもあるものじゃ。試しもしないうちに諦めてしまうのは、いかがなものかのう。」と、これに応えた。

それに対する社長さんは、

「ですが、試すといつても、どの様にしたら良いのでしょうか？」と、たずねた。

それに対する尊念は、

「まずは、若い衆を五人集めて、これから幹部になるための教育を行つ旨を告げるのじゃ。そして、了解を得たら、順次経営のノウハウを伝えつつ、色々な職場を体験させめるのじゃ。その結果、ある者は経理向き、ある者は営業向きとこうよつて、それぞれの性向が分かってくゐるじやう。そしたら、その中から最終的な後継者を選び出せば良いのじや。」と言つた。

それに対しても社長さんは、

「それは言つても、つまへこへのやじょうつかね？」と、たずねた。

それに対しても尊念は、

「それは、やつてみなければ分らぬことじや。じゃが、工場を守りたいのであれば、そつするしかあるまじのう。」と答えた。

それに対しても社長さんは、

「そりですな。確かに、今は、そつするしかなさそつですなあ。」と応えた。

そして、

「他にも、工場を良くする妙案がありましたら、教えて頂けないでじょうか？」  
と、たずねた。

それに対しても尊念は、

「経営において大事なことは、経営の基盤を強化する」とじや。そのためには、まず、  
借金をせぬことじや。借金をすれば、利益が利払いに消えていく。だから、苦しくても借金をせぬことじや。そつすれば、そのつひ金まわりは良くなつてこくものじや。」

と答えた。

それに対する社長さんは、「和尚さん。それは、無理とこいつものですよ。いつのよいうな零細企業は、借金なしでは、やつてはゆけません。それは、あくまでも、夢の話しちょひ」と言った。

それに対する尊念は、

「では、そちは、いつまでも今の状態でよいのかのう。利払いがなければ、そちの会社も、随分楽になるのではないかのう。」と応えた。

それに対する社長さんは、

「では、和尚さん。どの様にすれば、借金は、せずに済むのでしょうか?」と、たずねた。

それに対する尊念は、

「まず、支出を徹底的に抑える」とじや。そして、工場の《量産性》を高めるのじや。」と答えた。

それに対する社長さんは、

「量産性と申しますと?」と、たずねた。

それに対する尊念は、

「量産性とは、省力化のことじや。今まで一人でやっていたことを一人でやる。その様にすることじで、製造コストが下がるのじや。そうなれば、利幅が増えて利益も増えるじやろ? じゃが、それで喜んではいかん。眞の経営強化を目指すのであれば、浮いたコスト分で、価格を下げる必要じや。」と答えた。

それに対する社長さんは、

「しかし、和尚さん。儲かつた分、価格を下げては、意味が無いでしょ?」と質問をした。

これに対する尊念は、

「価格を下げるは、市場の占有率(シヨア)は、上がるのじや。価格が下がつても、利幅が今まで通りなら、出荷が増えて、利益も、増えるはずじや。」と答えた。

それに対する社長さんは、

「なるほど、そうですか。ですが、どうやつたら量産性は上がるのですかな?」と質

問をした。

それに対し尊念は、

「まずは、やらなくて良い作業を無くすことじや。次に、機械が出来る事は、機械に任すことじや。そして最後に、人がやらねばならぬ作業であつても、更なる省力化を検討することじや。」のよひにしていけば、順次仕事の量は減つてゆき、量産性は上がつていけばすじや。」と答えた。

それに対し社長さんは、

「でも、どのようにすれば、やらなくて良い作業を探せるのでしょうか？」と質問をした。

それに対し尊念は、

「まず、最終製品とは何か?を考えることじや。そして、そこから至る最短ルートを書き出して、今の作業と照らし合せてみるとことじや。そうすれば、やらなくて良い作業は、直すと分かるはずじや。」と答えた。

それに対し社長さんは、

「ですが、量産性を上げては、人余りになりませんかな?」と質問をした。

これに対して尊念は、

「確かに、量産性を上げれば、人は余るものじゃ。じゃが、その余った人は、新しい事業に割り当ててゆけばよいのじゃ。そつすることと、会社も少しずつ、新陳代謝をしていくのじゃ。」と答えた。

それに対して社長さんは、

「確かにそうですが、新しい事業を切り開くことは、難しいことですね。」と応えた。

それに対して尊念は、

「そこを何とかするのが、その役目じゃね?」と答えた。

それに対して社長さんは、

「まあ、確かにそうですね。分かりました。他に何か、」」意見はありますか?」と、たずねた。

それに対して尊念は、

「そうじやのう。更に付け加えれば、品質を向上させることも大事じやのう。そのためには、会社の意義から問い合わせなればならんじやう。」と答えた。

それに対しても社長さんは、

「会社の意義を問い合わせますと申しますと?」と訊き返した。

それに対しても尊念は、

「会社の意義とは、働く意義を意味しておる。そして、人というものは、仕事に意義を持てなければ、真に力を發揮できぬものじや。確かに、名誉栄達や生活のために働く者もある。じやが、それでは、真に己の力を發揮することはできないものじや。人が真に力を發揮するのは、働く意義が『社会への貢献』と一致するときのみじや。じやから、社員の力を發揮させるためには、まず会社の意義を社会への貢献に改めることが必要なじや。そして、その様にすることによって、社員一人一人が、社会の中で、真に力を發揮していくことができるのじや。」と答えた。

それに対しても社長さんは、

「ですが、会社の意義を変えれば、本当に製品の品質は良くなるものでしょうか?」

と質問をした

それに対する尊念は、

「社会への貢献を団指す者に」として、社会とは「わざ家庭と同じようなもの」じゃ。じやから、その家庭にて、粗悪な製品を供給しようと悪い者達、おるやうに。むしろ、良い製品を、社会に供給しようとするとするはず」じゃ。」と答えた。

それに対する社長さんは、

「確かに、そうですなーで、具体的には、どうすればよこのですかな?」と質問をした。

それに対する尊念は、

「まずは、会社の経営理念を社会貢献に改めること」じゃ。そして、そのことを社員に伝え、自らも、それを日々確実に実践すること」じゃ。口先だけではなく、厳しく局面でも、自らそのことを実践するのじゃ。やつする事によって、初めて社員は、会社の価値基準が何であるかを知ることができるのじゃ。」と答えた。

それに対する社長さんは、

「なるほど、そうですか。で、他には、何かする事は、ありますかな?」と、たずねた。

それに対する尊念は、

「更に品質を上げようとするのならば、経営理念に倣(なら)つた組織や仕方の再構築が必要となる」とじやうひ。そのときには、《トップダウン思考》とこうものが是非必要になつてくのじや。」と答えた。

それに対する社長さんは、

「トップダウン思考と申しますと?」と訊き返した。

それに対する尊念は、

「トップダウン思考とは、上位の目的からそれを実現する下位の手段を順次決めていく思考方法のことじや。例えば、そちの会社の経営理念を『金型生産で社会に貢献する』とじよひ。すねじ、それを実現するためには、金型の品質・価格・納期・環境保全において社会貢献する』とが必要となつてくる」とじやうひ。そして、次に、例えば、金型の品質で社会に貢献するとは、どのようなことであるかを、考えるのじや。

それが、誤差を千分の一ミリメートル以下にすることだとすれば、次は、どうすれば、それが実現できるかを検討するのじゃ。その様にして、上位から、それを実現する具体的な仕組み（基準と手順）を順次決めていくのじゃ。それが、トップダウン思考というものじゃ。」と答えた。

それに対する社長さんは、

「それは、かなり大変ですね。」と応えた。

それに対する尊念は、

「確かに、大変な作業じゃ。じゃが、そのようにしてこそ、品質や効率を支える最良の組織ができる上なるといつものじゃ。」と応えた。

それに加えて、尊念は

「更に付け加えるのであれば、仕事を計画的に行なうことが大事じゃ。日々の工程管理や購買管理だけではなく、資金管理や研究開発、それと教育を計画的に行なうことじや。また、操業管理だけではなく、仕事の負荷管理と社員の休養管理も行なうことじや。もうしてこそ、社員は、効率良く仕事ができるといつものじゃ。」と答えた。

それに対しても社長さんは、  
「しかし、そのような管理は、とてもわし一人では、できやうにもありませんなあ。」  
と応えた。

これに対して尊念は、

「確かに、そち一人でそこまで管理するのは無理じゃろう。じゃが、何事も、成そう  
と思えば、成せるものじや。」いは、面倒くさがらずに、後継者チームを中心に、管  
理を任せてみてはどつかのう。」と答えた。

それに対して社長さんは、しばらくなげに渋い顔で唸(うな)っていたが、後継者の育成問題  
もあつたので、

「分かりました。和尚さん。やれるだけのことは、やつてみましょ。」と応えた。

それを聞いて、尊念は、喜んだ。

そして、その後、一人は、しばらく、雑談を続けたが、話題は、今後の経済へと移つ  
ていった。

そこで、社長さんは、

「和尚さん。これから世の中は、どのような形になつていくのでしょうかのうかのう?」と質問をしてみた。

それに対しても尊念は、

「わしさ、この世の中が、今後、《善意主義社会》になるものだと思つておる。」と答えた。

それに対しても社長さんは、

「善意主義と申しますと?」と、たずねた。

それに対しても尊念は、

「善意主義とは、人々が善意を基準に行動することじや。現在のような嘗利主義の世の中が、立ち行かなくなつてはいるのは、誰の目にも明らかじや。そして、これからは、いかなる組織も嘗利主義では、生き残れない世の中になることじやうつ。」と答えた。

それに対しても社長さんは、

「ですが、和尚さん。嘗利主義の会社は、そう簡単に世の中から消えたりはせんことでしょ?」と應えた。

それに対しても尊念は、

「そちは、そう思つておるようじやが、善意主義の会社は、全ての面で當利主義の会社より優れておるのじや。例えば、善意主義の会社は、社会への貢献を目標としておるから、常に、良い製品を世の中に出すそつと努力することじやうひ。また、量産性を上げ、常に利益最小を目指しておるから、価格面でも常に業界のトップレベルにあることじやうひ。そして、納期面でも、また、環境面でもそつじや。そして、それを実現するために、高い管理能力を備え、無借金経営を目指すことじやうひ。」と答えた。そして更に、

「もし、このように全方向に優れた善意主義の会社が、その会社の前に現れたら、はたして、そちの会社は、その会社に太刀打ちしていけるのじやうひか？」と問いかけた。

それに対して社長さんは、

「そんな会社が現れたのならば、うちの会社なんぞ、ひとたまりもありませんなあ！」と応えた。

それに対しても尊念は、

「そりゃうりつ。じゃから、今のうちに、そのような会社になつておく」とが必要な  
のじゃ。」と答えた。「……」、社長さんは、やつと、尊念が今まで熱心に説明し  
てきた意図を理解した。

しかし、社長さんは、次のように答えた。

「じゃが、和尚さん。うちは、株式会社じゃ。株主のために一定の配当もせにやなら  
んし、利益も上げにやならん。和尚さんの言つよつな完全な善意の会社になる訳には、  
まいりますまい。」と。

それに対する尊念は、

「では、そちは、株式会社を、やめてしまつてはどうじや。自社の株を買つ戻せば良  
いだけのことではないか?」と応えた。

それに対する社長さんは、

「そつはいつても、和尚さん。そんな余裕は、ありません。」と応えた。

それに対する尊念は、

「なにも、今すぐでなくて良いのじや。時間をかけて、少しづつ買い戻していくべき良いではないか。」と応えた。

それに対して社長さんは、

「そうですね。まずは、業務改善が先決ですね。自社株買いは、後の課題といふことにしておきましょう。」と応えた。

それを聞いた尊念は、

「そうじや。それで良いのじや。」と応えた。

それから、尊念は、次のように言った。

「なあ、社長さん。わしには、一つ理想があるのじや。」と。

それに対して社長さんは、

「和尚さんの理想と申しますと?」と詰き返した。

それに対しても尊念は、

「わしの理想は、この世の中に《社会としての組織》が実現されることじや。」と答えた。

それに対する社長さんは、

「社会としての組織と申しますと？」と語を返した。

それに対する尊念は、

「社会としての組織とは、社員を社会の一員のように大切にする組織のことじや。そこでは、決して解雇は行わない。どんなに経営が苦しくとも、給料を分け合って生きていく、そんな会社が生まれることが、わしの理想なのじや。」と答えた。

それを聞いた社長さんは、胸を打たれた。僧侶の身でありますながら、そこまで社会を思いやる、そんな尊念に、改めて胸を打たれた。そして、自分では果たせぬその理想を、自分に託しているのだと思った。

そこで、社長さんは、

「分かりました。和尚さん。わしも、あと何年働くか、わからんが、和尚さんの理想に少しでも近づけるように、努力を致しましょう。」と応えた。

それを聞いた尊念は、

「どうか、やつてくれるか？社長さん。」と言つて、社長さんの手を強く握り絞めた。

そして、気が付けば、いつのまにか雨は上がり、雲の合間からは、夏の空が見えていた。

それから数年後、社長さんの会社は、大きくシェア（：市場の占有率）を伸ばし、テレビの取材を受けるまでに成長した。尊念は、その話を聞く度（たび）に嬉しくなった。そして、やがて世界中の企業が、社長さんの会社のようになり、終生安心して働ける、そんな会社になることを、心より願っていた。

## 十、二元論者との対話

ある夏の暑い日、一人の青年が敬足寺を訪れた。彼は、大学の理学部の学生であり、以前、尊念の説法を何度か聞き、いくつかの点で疑問を持ち続けてきたという。そこで、今日は、長年の疑問を晴らすべく、敬足寺に乗り込んできたという訳である。尊念は、彼を本堂に招き、そして、一人は、この本尊の前で対座した。

開口一番、学生は、

「和尚さん。和尚さんは、世界をどのように捉(とら)えているのでしょうか?」と質問をした。

それに対し、尊念は、

「インドの古い聖典に、万物とは、《神》と《プラクリティ(幻)》との見せかけの結

合であると記されておる。神とは、プラクリティと《空》以外のすべてであり、プラクリティとは、神と空以外のすべてである。そして、プラクリティは、神の愛に応えて万物を生成する。この様にして、世界は形成され、万物は、流転し続けておるのじや。」と答えた。

その答えに学生は、のつけから仰天したが、気を取り直して、次のように質問をした。  
「それでは、和尚さん。物質とは、何でしようか?」と。

それに対し尊念は、

「物質も、神とプラクリティの見せかけの結合なのじや。即ち、物質とは、プラクリティの一部と、神の一部が合体して出来ているものなのじや。」と答えた。

それに対して学生は、

「それでは、神は、物質の中で、何をしてくるとこののじや。」と質問をした。

それに対して尊念は、

「神は、物質の中で、物質が物質であることを支えておるのじや。」と答えた。

それに対して学生は、

「太陽のような高温の場所でも、神は、物質を支えているとおっしゃるのでしょうか？」と質問をした。

それに対しても尊念は、

「その通りじゃ。神の力は、至る所に及んでおるのじゃ。たとえ、太陽であつても、それは同じことじや。」と答えた。

それに対しても学生は、

「太陽は、核融合<sup>合</sup>反応によって、光り輝いているのではないでしょうか？」と質問をした。

それに対しても尊念は、

「もちろんそうじや。神は、太陽の内にあつて、太陽が太陽であることを支えておるのじや。」と答えた。

それに対しても学生は、

「では、神は、なにゆえに、そのような事をするのでしょうか？」と質問をした。

それに対しても尊念は、

「神は、万物を愛してある。それ故に、神は、万物を支え続けてあるのじや。」と答えた。

それに対する学生は、少し間を置き、

「それでは、空やプラクリティとは、なんでしょうか?」と質問をした。

それに対する尊念は、

「空もプラクリティも、神同様に、始まりもなく終わりもなく存在するものじや。そして、プラクリティは、万物の母体であり、空は、いかなる属性も持たないものなのじや。」と答えた。

それに対する学生は、

「では、プラクリティは、何ゆえに万物を生むのでしょうか?」と質問をした。

それに対する尊念は、

「プラクリティは、ただ単に、神の愛に応えているだけなのじや。故に、万物は、神の性質をよく表わしておる。」と答えた。

それに対する学生は、

「では、万物のどこが、神の性質を表わしているのでしょうか?」と質問をした。

これに対して尊念は、

「鉱物は、神の忍耐と誠実をよく表わしている。そして、生物は、神の多様性と柔軟性、創造性をよく表わしている。そして人間に至つては、更に知識を理解する力と愛と善意を兼ね備えてある。」のように万物は、それぞれが、神の性質をよく表わしているのじゃ。」と答えた。

それに対して学生は、

「生物が、多様性を備えるに至つたのは、単に、厳しい生存競争の結果だつたのではないのでしょうか?」と質問をした。

それに対して尊念は、

「生物は、時間とともに、たまたま高度なものに進化してきたと論じる者がある。じやが、我々は、何億年経つても、地中より新品の自転車が、たまたま現れないことを知つてある。じゃから、自転車よりも遙(はる)かに高度な生物が、たまたま進化するということは決してないのじゃ。それらは全て、プログラミングの意思(・シャクティ)に

よつて進化してあるのじや。」と答えた。

それに対する学生は、

「すると、人間も、プラクリティの意志によつて出現したとおつしやるのぢょうか？」と質問をした。

それに対する尊念は、

「そうじや。その通りじや。人は、万物の中にあつても、最も神に似ておると言つておる。」と答えた。

それに対する学生は、

「和尚さんの言つていることは、信じられない。失礼ですが、單なる妄想ではないのでしょうか？」と問い合わせた。

それに対する尊念は、

「そちら二元論者は、世界とは、物質的なものであり、神など、妄想にしかすぎないと信じておるよつじやが、それは誤りじや。神は、こつしている間も、そちの人生を支えておるのじや。」と答えた。

それに対しても学生は、

「信じられない。和尚さんの言つことは、何の証拠もない。」と反論をした。

それに対しても尊念は、

「では訊くが、野に咲く花は、何ゆえに美しい。我々は、何ゆえに生きてある。そち達、二元論者は、それも皆、たまたまであると論じるのである。」と答えた。

それに対しても学生は、

「その通りです。和尚さん。我々は、無目的に生まれ、死ねば、《無》になるのみです。」と答えた。

それに対しても尊念は、

「確かに、我々は、神の愛に応えて無目的に生まれた。じゃが、この困難な世界に生まれたのは、更に魂を磨くためなのじゃ。」と答えた。

それに対しても学生は、

「それもプラクリティの意思といつやつですか？」と質問をした。

それに対しても尊念は、

「そうじや。その通りじや。我々は、魂を磨くことによつて、神に至るまで進化する」ともできるのじや。それじや、この地上に生まれた本當の田標なのじや。」と答えた。それに対しても生徒は、

「魂を磨くのに、何ゆえにこの世界に生まれる必要があるのでしょつか?」と質問をした。

それに対しても尊念は、

「そちは、学校の夏休みが、もし、無期限であつたとしたら、いつたい、いつ、宿題を終えるのじやろつか?恐らく、いつまで経つてもやることはないじやわつ。じやから、宿題をやるために期限が必要なのじや。期限があつてこそ、人は、やる気になるものじや。また、資源が限られておれば、人は、様々な局面で、それをなんとか乗り越えようと努力することじやわつ。じやから、何事も限りあるこの世界とは、魂を進化させる上で、最も都合がよい場所なのじや。」と答えた。

それに対しても生徒は、

「でも、魂を磨いたといひで、死んでしまつては元も子も無いのではないのでしょ

か?」と質問をした。

それに対する尊念は、

「我々とは、肉体を伴つた靈なのでじや。じゃから、たとえ、肉体が滅びたとしても、魂を失つことは、決して無いのじや。」と答えた。

それに対する学生は、

「和尚さんは、我々が、靈であるとおっしゃるのでしようか? 信じられない。そんな証拠は、どこにあるとおっしゃるのじようか?」と聞こ返した。

それに対する尊念は、

「確かに、靈である自分を捉(とら)えることは難しい。じゃが、我々の本質が靈であることは、幾つかの事実によつて知られつあることなのじや。」と答えた。

それに対する学生は、

「それは、科学的に検証可能のことなのでしょうか?」と質問をした。

それに対する尊念は、

「そうじや。それらは、科学的に検証可能じや。例えば、ある《氣》の道場では、肉

体の中に宿る氣を、覺醒した状態で体験することができるのじや。そして、そのじとは、科学的にも検証可能なことなのじや。」と答えた。

それに対する学生は、

「それは、だれでも体験できることなのでしょうか?」と質問をした。

それに対する尊念は、

「それは、誰でも体験することができるものじや。」と答えた。

それに対する学生は、

「それは、僕にでも体験できることなのでしょうか?」と質問をした。

それに対する尊念は、

「もちろん、そちは、体験することができる。一度、自分の目で確かめてみるのもよからう。」と答えた。

それに対する学生は、

「では、それは、どのようにすれば体験することができるのじや?」と質問をした。

「これに対しても尊念は、

「それは、インターネットで、気と呼吸法について検索してみれば分かる」とじゅう。  
そうすれば、世界中に、様々な体験機会があることを知ることができる、いや、いつ。」と  
答えた。

それに対して学生は、

「分かりました。さっそく調べてみましょう。」と応えた。

しかし、学生は、次のように応えた。

「でも、和尚さん。僕は、未だに、神だのプラクティシャンだのを信じることはできません  
ん。」と。

それに対して尊念は、

「存在しないものを信じたり、存在するものを信じないことは、良くない」とじゅう。  
じゅうから、そうではなく、《考え・感じる》ことが大切なのじゅう。」と答えた。

それに対して学生は、

「では、どのようにすれば、神を感じることができるのでしょうか?」と質問を

した。

それに対する尊念は、

「 じやが、その前に、それは、『神とは何か?』を知らねばならぬといじやう。」 と  
答えた。

それに対する学生は、

「 それでは、神とは、いかなる者でしょうか? 」 と質問をした。

それに対する尊念は、

「 神とは、無執着、かつ、永遠・無限の愛を有する者なのじや。」 と答えた。

これに対する学生は、

「 では、なぜ、神は、無執着で永遠・無限の愛を有してこらえてるのでしょうか? 」

と質問をした。

それに対する尊念は、

「 もし、神が、無執着でなく、又は、有限な愛を有しておるとこつのであれば、この  
世は、もっと恣意(しい)的になつてゐる」とじやう。じやが、現実の世界に、その

よつな偏(かたよ)りが無いことが、神が、無執着で永遠・無限の愛の持ち主であることを物語つておるのじや。」と答えた。

それに対する学生は、

「でも、現に、運の良し悪しや、不平等が起きているではないでしょうか?」と反論した。

それに対する尊念は、

「それは表面上のことじや。まず言えることは、どのような状況であろうとも、物理の法則は変わらないことじや。そして、この世では、自業自得の法則も、変わらないことじや。」と答えた。

それに対する学生は、

「でも、現実の世界では、他人を騙(だま)して得をしたり、また逆に、他人に騙され損をしたりする人がいるではないですか? それでも、神は、永遠・無限の愛の持ち主であるというのでしょうか?」と反論をした。

それに対する尊念は、

「神は、いつも、《人の心の成長》を見ておるのじや。他人を騙して得をしたように見えても、魂の成長からすれば、逆に損をしておるのじや。また、騙されて苦労したように見えても、実際には、騙された教訓（知識）を得ておるのじや。じゃから、心の成長という観点より見れば、人の世においても不平等は、生じておらんのじや。」と答えた。

それに対しても、学生は、

「でも、和尚さん。何の罪もなく、事故や災害によって死ぬ場合でも、不平等は生じていないとおっしゃるのでしょうか？」と質問をした。

それに対して尊念は、

「その場合でも、自業自得の法則は、破られることはないのじや。不慮の事故や災害であつても、本人に何らかの落ち度はあるものじや。本人に落ち度無く、何かを得ることは、決してないものじや。」と答えた。

それに対して学生は、

「それでは、なぜ、神は、人に自業自得の法則を『えているのでしょうか？』と質問

をした。

それに対する尊念は、

「それは、人が、成長するために、神が、与えたものなのじゃ。」と答えた。

それに対する学生は、

「人の成長と自業自得は、どのような関係にあるのでしょうか？」と質問をした。  
それに対する尊念は、

「もし、自業自得の法則が無かつたら、人が悪事に流され、その心のレベルを果てしなく下げていったときには、人は、永遠に浮き上がることができぬかもしだ。じゃが、自業自得の法則は、常に本人に付いて回り、今の状態が誤りであることを指し続けるのじゃ。そして、本人が、そのことに辟易(へきえき)し、そのことに気づき改心するまで、自業自得は永遠に繰り返されるのじゃ。それは、どのような人も決して見捨てない、神の慈愛を示しておるのじゃ。」と答えた。

それに対する学生は、

「それでは、和尚さん。人は、成長すると最後に何になるのでしょうか？」と質問を

した。

それに対する尊念は、  
「人は、いつの日か、神のように、無執着で、永遠・無限の愛を有する者になること  
じゃねえ。」と答えた。

それに対する学生は、

「でも、和尚さん。人は、容易に無執着で永遠・無限の愛を獲得することはないでし  
ょう。」と応えた。

それに対する尊念は、

「確かに、そうじゃ。じゃが、自己を愛し、そして、日々善意を実践し、その上で、『私  
は、永遠に貴方と一体。』と思つて」と云つて、人は、最短で、無執着で永遠・無限の  
愛に至ることができるじゃねえ。」と答えた。

それに対する学生は、

「『永遠に一体』と思う貴方とは、誰でしょうか？」と質問をした。

それに対する尊念は、

「その対象は、何でも良いのじゃ。じゃが、特に、人は、恋人を対象とすれば、一層強力に、無執着で永遠・無限の愛に至る道を、歩んでいくことじやうつ。」と答えた。

それに対する学生は、

「それは、なぜでじょうか？」と質問をした。

「これに対する尊念は、

「それは、性の働きじよぶるものじや。」と答えた。

それに対する学生は、

「では、性は、どのような働きをするといひでじょうか？」と質問をした。

それに対する尊念は、

「性は、異なるものを結び付ける働きがあるのじや。じやから、性は、精神的にも一體であろうとする者を、強力に結びつける働きがあるのじや。」と答えた。

これを聞いた学生は、少し考えた。確かに、性的に結びつくる者は、一時的には、愛を感じることもあるだうつ。しかし、それでも、それは、無執着なものとまでは、いえないであろう、と。

そこで次のような質問をしてみた。

「和尚さん。『永遠に一体』と思つたところで、人は、無執着にはならないのではないのでしょうか？」と。

それに対し尊念は、

「『永遠に一体』であろうと思う者は、無執着そのものなのじや。なぜならば、相手と一体になることは、自分を捨てることを意味するからじや。」と答えた。

それを聞いた学生は、驚いた。人が、そこまで、美しくなりえるものだとは、今まで、考えてもみなかつたからである。

そこで、次の質問をした。

「和尚さん。これから、人類は、どのよひになるのでしょうか？」と。

それに対し尊念は、

「人類は、これから益々光り輝くことじやろう。」と答えた。

これを聞いた学生は、嬉しくなつた。暗いニュースの多い昨今で、一條の光明を感じたからである。

そして次のように応えた。

「和尚さん。僕は、和尚さんの話が、ほとんど理解できませんでした。ですが、これからは、もう少し、自分なりに勉強をして、和尚さんの極意のことが理解できるようになっていきたいと思います。本日は、どうもありがとうございました。」と。

それに対しても尊念は、

「そうか。それは良いことじゃ。寺には、いつでも来られるといふこと。」と応えた。それを聞くと学生は、立ち上がり、一礼をして、本堂を後にして、

それから一年経つたある日、その学生が、また寺を訪れた。

そして、学生は、

「あれから一年間、自分なりに考えたり、調べてみたりもしましたが、最近になつて、やつと、和尚さんの言つてこなしが、少し分かつてきましたよつた気がします。今後も、自分なりに色々とやってこなすと思います。」と言つた。

それに対しても尊念は、

「そうか、それは良い」とじや。その様にしていけば、やがて、そのつか、本日の世

界を感じるようになる」と「じや ろい。」と応えた。

そう言って尊念が天を仰ぐと、林の上には秋空が広がっていた。そして、尊念は、自分も一層精進し、一人でも多くの者が、自分の真の生き方に目覚めてゆけるように、今後も、一層努力をしていこうと決意した。そして、そんな二人の横顔を、木漏れ日は、優しく照らし続けていた。

## 付録一、余事象法について

人は悩み苦しむ。皆も、仕事や家庭において、毎日、なにかしかの問題に困るつゝじやるつ。中には同じことを繰り返して、悩んでおる者もある。そして、問題は、毎日のように訪れ、いついつに止む気配がない。それは、なぜじやるつか？それは、我々が、本当の原因を知らずに、やるべきことをやつとらんからなのじや。本当の原因を知り、その本当の対処方法を行なわない限り、同じ問題は、繰り返して起きるのじや。

では、どのようにすれば、本当の原因を知り、問題の発生を止めることができるのじやるつか？それに応えてくれるのが、余事象法と呼ばれる思考法なのじや。では、余事象法とは何か？まず、その基本の部分から見ていくことにしよう。

多くの者は、「問題Aの原因は $\exists x$ 」にあるのか?」と問われても、大抵の場合は、「抽象的過ぎて、答えられない。」と答えるじゃね。じゃが、この問には、答えがあるのじゃ。まず、結論からいへば、この問の答えは、「問題Aの原因は、問題Aの余事象の、十分条件の余事象の中に存在する。」となるのじゃ。なにやら、お経の様ではあるが、実は、たほど難しいことではない。中学校の数学で、《集合》とこうものを習ったことじやない。四角い枠の中に、丸をいくつも書くやつじや。余事象も、十分条件も、そこで教わったことじや。いじりで、少しおもひをしておくと、余事象とは、《そのもの以外》ということであり、十分条件とは、《絶対そなうる条件》のことなのじゃ。どうじや、少しは思い出したじやらうか? それでは、先ほどのことだが、なぜ言えるのか、その理由を、図を用いながら説明していへば。

まず、図1を見てほしい。図の右下に、 $\neg A$ が書いてあるじゃね。これを問題Aと呼ぶことにしよう。すると、全体を表す四角い枠の中で、A以外の部分(即ちBの部分)が、問題Aの余事象となるのじゃ。そして、Bの意味は、「問題A以外の状態」即ち「問題Aが起きない状態」を意味するのじゃ。

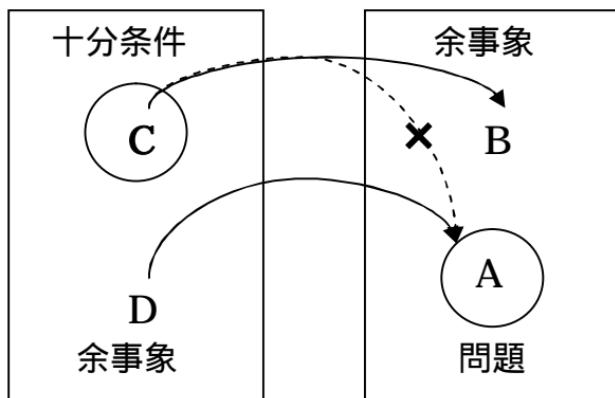


図 1

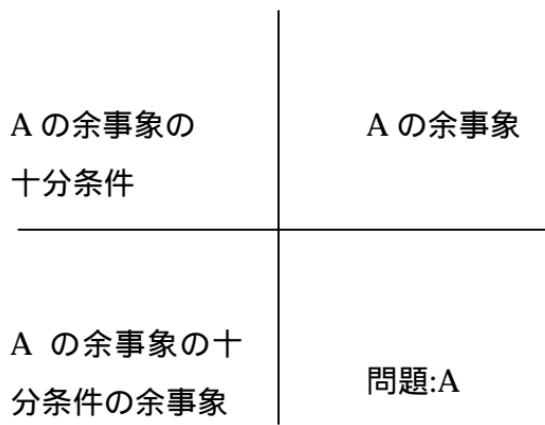


図 2

更に、こので B の十分条件 (C) (：図中の C) を考えてみよ。すると、十分条件 (C) の意味は、「問題 A が絶対起きない条件」となる。更に、その四角い枠の中の、C 以外の部分(即ち C の部分)が、十分条件 (C) の余事象となるのじゃ。

そこで、問題 A の原因といふものを考えてみよ。すると、問題 A の原因は、必ず、この余事象 (D) の中になければならぬこと) が分かる。なぜならば、仮に、問題 A の原因が、余事象 (D) 以外のところにあるとするのならば、当然、それは、余事象 (D) 以外の部分、即ち、十分条件 (C) の中にあるところ) となる。じゃが、十分条件 (C) は、問題 A が絶対起きない条件であるから、これによつて、問題 A が引き起こされることは決してないのじゃ。じゃから、もし、問題 A が生じるとするのならば、その原因は、必ず、十分条件 (C) 以外の場所、即ち、C の余事象 (D) の中に存在しなければならないとこことになるのじゃ。そして、余事象 (D) とは、『問題 A の余事象の十分条件の余事象』であるから、これをまとめると、「問題 A の原因是、問題 A の余事象の、十分条件の余事象の中に存在する。」となるのじゃ。分かつて頂けたかな？

多くの者は、日々、原因追究に明け暮れておるが、本当の原因是、「問題の、余事象

の、十分条件の余事象の中に存在する「こと」を、知つておかねばならぬ」のじや。

じやが、「それが分かつたといひや、じつやつて問題を解決するの?」と言いたいのが本音である。じやから、次に、これを用いて、いかにして問題を解決するのかを見ゆくことによひ。

その為には、まず、紙と鉛筆を用意して下され。用意が出来たら、紙面の右上に、大きめの十字を書いて下され。そして、次に、十字の右下に、自分の問題の内容を書いて下され。更に、その問題の余事象を、その上(十字の右上)に書いて下され(図2参考)。じやが、いじり、「問題の余事象とはどう書くの?」と、また頭をかしげたくなる」とじやりひ。思い出して下され。余事象とは、《そのもの以外》のことであつた。例えは、そちの問題が、「子供が学校に行かない。」ことだとしょひ。すると、その余事象とは、「子供が学校に行く。」となる。すなわち、余事象とは、その問題の《否定形》を書けば良いのじや。そして、次に、十字の上段の左と右の中間に、左から右に向かう矢印(→)を書いて下され。そして更に、先に書いた余事象の十分条件を、矢印の左側(十字線の左上)に書いて下され。いじりで、十分条件とは、《絶対そうなる条件》

のことであつた。先の例でいえば、子供が絶対に学校に行く条件が、それにあたるのじや。子供は何であれば絶対学校に行くのじやろうか？皆も考えて下され。まず、一つ言えることは、「子供は、樂しければ学校に行く。」ということじや。学校が樂しければ、学校に行くなど言つても、子供は、学校に行きたがるじやろ。そして、もう一つは、「学校に行く」とが、有意義であることを、子供が理解していぬ。「場合じや。」この場合は、学校がつまらなくとも、子供は、学校に行くはずじや。よつて、先の「絶対学校に行く十分条件」とは、「学校が樂しい、または、学校に行く」とが有意義であると理解している。となる。そしたら、次に、その否定形（余事象）を、その下の欄に書き、最後に、下段の左と右の中間に、左から右に向かう矢印（→）を書いて下され。ここで、一つ注意して頂きたいのが、「A、または、B」の否定形は、「Aでない、かつ、Bでない」となることじや。そして、「A、かつ、B」の否定形は、「Aでない、または、Bでない」となることじや。よつて、先の十分条件の否定形とは、「学校が樂しくない、かつ、学校に行くことが有意義であると理解していない。」となる（図3参考）。つまり、子供たちは、学校に行くのが樂しくないし、かつ、学校に行く意義を見

|                                   |             |
|-----------------------------------|-------------|
| 学校が面白い、または学校に行くのが有意義であると理解している。   | 子供が学校に行く。   |
| 学校が面白くない、かつ学校に行くのが有意義であると理解していない。 | 子供が学校に行かない。 |

図 3

|                               |                            |
|-------------------------------|----------------------------|
| 人生の目的と学校教育の位置づけとその効果を理解している。  | 子供達が学校に行く事が有意義であると理解している。  |
| 人生の目的と学校教育の位置づけとその効果を理解していない。 | 子供達が学校に行く事が有意義であると理解していない。 |

図 4

いだしていないので、学校に行きたがらないのじや。そして、子供たちが、学校が面白くない、学校に行く意義を見出せないのは、我々、大人達のせいなのじや。我々、大人達が、学校を面白くさせなければならぬし、学校を意義あるものにしてゆかねばならないのじや。

では、我々は、更に、原因を掘り下げる場合は、どのようにすればよいのであるか？その場合は、それについて、同じ作業を繰り返せばよいのじや。例えば、「子供達が学校に行くことが有意義であると理解していない。」と、ことの原因をもつと知りたいとしよ。その場合は、まず、新たな十字線の右下に、「この問題を書くのじや。そして、次に、その問題の余事象、つまり、「子供達が学校に行くことが有意義であると理解している。」と、つ言葉を、その上に書くのじや。そして、その十分条件を考えて下され。なんであれば、子供達は、学校に行くことが有意義であると、理解できるのであるうか？徹底的に考えて下され。どうじやろうか？解けましたかな？確かに、これは、難題である。じやが、わしなら、こう答える。まず、そもそも、なぜ学校に行くのか？それを理解するためには、まず、人生の目的が何であるかを、理解す

る必要があることじやろ。その上で、人生における学校教育の位置づけと、その効果を理解しておれば、自ずと、学校に行く意義も、分かるといつものじや。つまり、子供達が学校に行くことが有意義であると理解できるための十分条件とは、「人生の目的と学校教育の位置づけとその効果を理解している。」となるのじや。そして、これを十字線の左上に書いて下され。そして、「」で注意せねばならないことは、「十分条件を考える際は、考えに枠をはめない。」といつことじや。とてもできそうになり事や、突飛な考えであっても、それが十分と言えるものであれば、それを取り上げることが大事なのじや。そして、最後に、「その十分条件の余事象、即ち、「人生の目的と学校教育の位置づけとその効果を理解していない。」を、その下に書いて下され。そして、これにより、我々は、子供達が学校に行くことが、有意義であると理解しておらん原因が、彼らが、人生の目的と、学校教育の位置づけと、その効果を理解しておらんところにあつたことを、知ることができるのじや（図4参考）。

じやが、「人生の目的とは何か？」、これまた難問の様に思える。じやが、それは、死の瞬間を考えれば、さしたる問題ではないのじや。人は、死の瞬間にいて、なん

であれば、満足できるのであるつか？それが、富や、権力でないことは、明らかである。なぜならば、それらは、この世に残ることもなく、あの世に持つていくことも出来ないもののじゃからじゃ。では、何が、この世に残るものであるつか？それは、人のために尽した善意や、人を愛した実績なのじゃ。これらは、いつまでも、人々の心に残り、語り継がれることじやうひ。そして、あの世に持つて行けるものは、何か？それは、自分の心のレベルの高さなのじゃ。そう、人生の目的とは、「人を愛し、社会に貢献し、己の心のレベルを高めること。」なのじゃ。これこそ、死んでも、この世に残るものであり、唯一あの世に持つて行けるものなのじゃ。そして、その成果が高ければ高いほど、人は死の瞬間ににおいても、自分で自分をほめることができるのじゃ。そして、学校教育の位置づけとは、そのための基礎を学ぶことじや。そして、その効果とは、社会に広く貢献するための学力や体力が身につき、恩師や友人・後輩と知り合い、そして、彼らに対する感謝や友情を深めることで、愛や善意・責任感が高められるということなのじゃ。これらが、学校教育の効果である。じゃが、そんな難しいことを言つても、子供が理解できるのであるつか？と、皆はそう思ひでるが、じゃが、

親や教師の真剣な熱意は、子供に伝わるものなのじや。初めは、十分理解できなくとも、直感で理解し、そして、成長に伴い、それは真実に変わるのじや。まことに、学校教育とは、このようなものではなくてはならないのじや。

さて、話は、変わるが、余事象法を、科学的な事柄に応用したらどうなるのじや。ひつか？ 例えば、ニコートンの世紀の発見：「ニコートンは、りんごが、木から落ちるのを見た。」とこの事柄では、りんごが、そのようなことは、天才にしかできない離れ業であると、皆は、思うであらひ。じやが、意外にも、そうでもない。余事象法を用いれば、それも、りんごが落ちるのを見ただけで、万有引力を発見することができるじや。ひそのよひで、本当の話である。疑うのであれば、例の「」とく、まず紙の上に十字線を書き、その右下に、「りんごが木から落ちる。」と書いて下され。そして、その上に、その余事象、即ち、「りんごが木から落ちない。」と書いて下され。そして更に、その左側に、「りんごが木から落ちない」ための十分条件を書いて下され。なんであれば、りんごは木から落ちないのか？ 一つは、「りんごが、下から支えられておる場合」じや。確かに、下から支えられておれば、りんごは、下に落ちよ

うがない。もう一つは、りんごが、上から吊り下っている場合じや。例えば、綱で吊ら  
れていては、同じように落ちようがない。では、りんごが落ちなこのせ、この一つだ  
けじや、落ちか? 例えは、ボールに力を加えると、ボールは、このままと転がり始める。  
そして、止まつたボールに力を加えなければ、ボールはいつまでも止まつたままでお  
るはずじや。そして、このひとは、りんごにつこても落してはあるはずじや。そう、3  
番目の条件は、「つる」と、力が加わらない。」とこりじとじや。即ち、りんごが、木  
から落ちないための十分条件とは、「りんごが支えられてこる、または、吊られてこる、  
または、力が加わらない。」となるのじや。そして、この余事象は、「りんごが支えら  
れていない、かつ、吊られていない、かつ、力が加わる。」となるのじや。即ち、りん  
ごは、支えられてもなく、吊られてもなく、力が加わるから下に落ちるのじや。では、  
このりんごに加わる力とは、何であろうか? それが、万有引力なのじや(図5参考)。  
どうじや、簡単である。これで、皆も、ニコートンと同じになれたとこりじとじや。  
では、次に、余事象法で社会問題を解いてみたら、どうなるのであるつか? 皆も、  
承知の通り、最近ではテロの横行する、物騒な世の中である。では、なぜ、テロが起

りんごが支えられてい  
る、または吊られている、  
または力が加わらない。

りんごが木から  
落ちない。

りんごが支えられてい  
ない、かつ吊られていな  
い、かつ力が加わる。

りんごが木から  
落ちる。

図 5

全人類が利他的で  
ある。

テロが起きない。

全人類が利他的で  
はない。

テロが起きる。

図 6

きるのか？その原因を余事象法で調べてみよう。例の「」とく、紙に十字線を引いて、その右下に、「テロが起きる。」と書いて下され。そして、その上に、その余事象、即ち、「テロが起きない。」と書いて下され。更にその左側に、「テロが起きない」十分条件を書いて下され。なんであれば、テロは起きないのか？皆も、考えてほしい。理想的の答えでよいので、書いてほしい。例えば、天国ではどうであるうか？天国では、テロは起きるであろうか？そう、天国ではテロが起きないと考えられる。では、なぜ、天国では、テロが起きないのであるうか？それは、天国に住む住人が、皆、自分の利益よりも、他人の利益を優先するからに違いない。つまり、利他的愛に満ちた人々は、自分の主張を、決して相手に押し付けたりはしないものじや。常に相手の心の成長を願つて行動する。だから、決して、相手を破壊しようなどとは思わないものじや。じやから、「テロが起きない」十分条件とは、「全人類が、利他的である。」と、いうことになる。即ち、全人類が利他的ではないから、テロが起きるのじや。某宗教団体の指導者も、某国の大統領も、利他的とはいえない。全員が利他的でない限り、テロが止むこ

とはないのじや。トロの無い世の中になるためには、我々一人ひとりが、利他的に生きる努力をする必要があるのじや（図6参考）。

そして、最後に、余事象法を哲學的に心用したら、どうなるのであるつか？ 例えば、「世界は、なぜ存在するのか？」という題材はどういぢやるつか？ 「また、どんなことじを言つて出す？」と、皆が思つておるじとじやるか？ でも、どんな答えになるのか、さつそく見てこくじとじよひ。また、例のじとく、紙に十字線を書いて下され。そして、その右下に、「世界が存在する。」と書いて下され。そして、その上にその余事象、即ち、「世界が存在しない。」を書いて下され。そして、その十分条件を、考えて下され。なんであれば、世界は、絶対に存在しないのか？ 皆はどう考えるであろうか？ 話はそれるが、皆も承知のとおり、神は全能である。全能でない神など、想像すら出来ない。では、この神が、もし、世界が存在しないことを希望したら、どうなるであろうか？ その場合は、もちろん、世界は、存在しないであろう。じゃが、皆の中には、神など、空想にしか過ぎないと、思つておる者もあるじやる。じゃから、神が存在すると仮定して、「世界が存在しない」ための十分条件は、「神が存在し、か

つ、神が世界の存在を希望しない。」となることじやうづ。そして、その余事象は、「神が存在しない、または、神が世界の存在を希望する。」となるのじや（図7参考）。つまり、世界が存在する理由は、「神が存在しない。」か、「神が存在し、かつ、世界の存在を希望する。」か、の、どちらかとことになるのじや。じやが、「この二つの世界には、大きな違いがあると考えられる。例えば、神が存在しないで、たまたま生じた世界は、どのような世界であろうか？おそらく、なんの法則もない、無秩序な世界となるか、仮に秩序があるとしても、その世界には、『愛』は、存在しないことじやうづ。なぜならば、『神こそ愛の源泉』じゃからじや。そして、愛のない世界とは、さしづけとして調和もなく、高度な生物が育つ事もないことじやうづ。なぜならば、愛がなければ、親は子供を育てないからじや。

一方、神が存在し、かつ、神が世界の存在を希望して生じた世界は、どのようなものであるつか？神は、愛の源泉であるから、こちらの世界は、愛や調和を基本とした世界になることじやうづ。我々のこの世界が、どちらの世界であるかは、言つまでもなからうづ。即ち、「世界は、神が存在し、かつ、その神が、世界の存在を希望している

神が存在し、かつ神が世界の存在を希望しない。

世界が存在しない。

神が存在しない、または神が世界の存在を希望する。

世界が存在する。

図 7

世界に空腹、老い、病、死がなく、かつ我々が利己的でない。

世界に、生老病死の苦しみがない。

世界に空腹、老い、病、死がある、または我々が利己的である。

世界に、生老病死の苦しみがある。

図 8

から存在して居るのである。」と、わしは考へてある。そして、神は、日夜我々の世界を支えてくれておるのじや。この世界に太陽が輝くのは、神のお陰であり、我々がこうして息ができるのも、神のお陰である。我々は、そんな神に、感謝しなければならないのじや。

じやが、この答へに満足しない者もおる」とじやろう。「『神が、愛の源泉である』のならば、なぜ、この世界は、こんなに苦しきものなのか?」と、確かに、この世には、生老病死の苦しみがある。では、次に、なぜ、この世界に、生老病死の苦しみがあるのかを、余事象法を用いて考へてみよう。例によつて、紙に十字線を引き、その右下に、「世界上、生老病死の苦しみがある。」と書いて下され。そして、その上に、「その余事象、即ち、「世界上、生老病死の苦しみがない。」と書いて下され。更に、「その左側に、その十分条件を書いて下され。なんであれば、世界から生老病死の苦しみがなくなるのじやろうか? そのためには、まず、神が、我々から空腹と老こと病(やまい)と死を取り除いてくれることが必要となる」とじやろう。じやが、それだけでは、我々は、生の苦しみから逃れることはできぬ。そのよひな患まれた状態で

あつても、おいしいものが食べたいとか、もっと美しくなりたいとか思つ」とじやう。人は、欲望を持つ限り、どのような状態においても、決して満足することはできないのじや。じやから、我々が、生の苦しみを乗り越えるためには、「己の利己心を捨てることが必要になるのじや。我々は、利己心を捨ててはじめて、恵まれた状態に満足することができるのじや。したがつて、「世界に、生老病死の苦しみがない」ための十分条件は、「世界に空腹・老い・病・死がなく、かつ、我々が利己的でない。」といふことになるのじや。そして、その余事象は、「世界に空腹・老い・病・死がある、または、我々が利己的である。」となるのじや。即ち、世界に、空腹・老い・病・死があり、または、我々が、利己的であるから、世界には、生老病死の苦しみがあるということになるのじや（図8参考）。

では、なぜ、この世界に、空腹・老い・病・死があるのであるつか？これを、更に進んで考えてみよう。例によつて、また、十字線を引き、その右下に、「世界に空腹・老い・病・死がある。」と書いて下され。そして、その上に、その余事象、即ち、「世界に空腹・老い・病・死がない。」と書いて下され。そして、その十分条件を考えて下

され。なんであれば、世界に空腹・老い・病・死がないのか……」と、空腹や老いや病や死のない世界を想像して下され。そして、次のように自問して下され。「私は、そのような世界について、はたして、進歩することができるのやあらうか?」と。なんの悩みも苦痛もない世界で、人が進歩する」とは、困難な」とである。なぜならば、悩みや苦痛こそが、人に反省を促し、それが進歩の原動力となるからじゃ。即ち、空腹・老い・病・死がない世界とは、進歩のほとんどない世界なのじや。よって、そのような世界に我々が住むとしたら、それは、神が、我々の進歩を、もはや望んでいない、と、ことになる。即ち、「世界に空腹・老い・病・死がない」ための十分条件は、「神が、我々の進歩を望んでいない」と、ことになるのじや。そして、その余事象は、「神が、我々の進歩を望んでいる」となる。即ち、神が、我々の進歩を望んでいるから、この世界には、空腹や老いや病や死があるのじや(図9参考)。我々は、神の期待に応えねばならない。そして、我々の心が無限に進歩し、利己心が全く無くなり、もはや我々が、空腹や老いや病や死を必要としなくなつた時には、我々は、その心のレベルにふさわしい、永遠の世界に住むことになる」とじやうへ、と、わしは考

|                     |                      |
|---------------------|----------------------|
| 神が我々の進歩を<br>望んでいない。 | 世界に空腹，老い，<br>病，死がない。 |
| 神が我々の進歩を<br>望んでいる。  | 世界に空腹，老<br>い，病，死がある。 |

図 9

べておる。

IJのよひに、余事象法とは、今までに解けなこよひな難問に答へを『べておる、  
素晴らしこ思考法でない。わしが、IJの余事象法(:SBC: Solution By Complementary  
event)を、知人のHンジニアより教わつた。皆も、仕事や家庭の難問解決に役立て  
トされ。

じやが、IJのよひに素晴らしこ余事象法にも欠点はある。一つせ、十分条件を思  
つても、時間がかかるとこひにじや。簡単な問題なら数分で解けるが、難しい問  
題となると、何ヶ円も考え続ける場合がある。IJのよひなどさせ、わしが、ひとつ、《つ  
とうとと考へる》IJと云つておる。うといと考へるIJと云つて、意識の力が弱まり、  
無意識のアイデアを捕らえやすくなるからじや。

やつ一つは、余事象法では解けない問題があるとこひにじや。例えば、「貧困であ  
る。」と云へ、あこまこな問題は解くIJができない。それは、問題があやふやである  
と、その余事象もあやふやとなり、結局は、その十分条件もあやふやになつてしまつ  
かひじや。IJの様な場合は、問題を具体的にあねIJがコシじや。例えば、「貧困であ

る。」とある代わりに、「預金残高が百万円未満である。」等と、具体的に問題を設定することが大事じゃ。また、相手と競合する問題も解くことができない。例えば、「試合に勝てない。」ことが問題であつたとするが、その余事象は、「試合に勝てる。」となるが、もし、「試合に勝てる」十分条件が存在するのならば、相手も同じ事をすれば双方勝つことになり、矛盾することになつてしまつからじ。や。

## 付録一、天使通信について

天使通信とは、何か？天使通信とは、大の靈より助言を頂く方法ですね。この様に聞ひよ、何やい様しおこ感づぬ者やおぬしにござりが、特に様こりいわかる話でせない。

方法は、いたつて簡単じゃ。

- 1) まず紙と鉛筆を用意する。ハーハンド・タッチのどちらかは、ハーハンド。
- 2) 質問内容を、紙に書く。
- 3) 田を軽く開じて、いじりながら。
- 4) 読む思つた事を、おぼえやく、素直に書く。

ただ、これだけのことじや。人には誰にでも、自分を導いてくれる守護霊が一人以上いると言わされておる。もし、それが、本当の話であるのならば、守護霊はいつも、自分のそばにいて、我々にアドバイスを下さってくれようとしておるはずじや。そこで、試しに、天使通信を思いつき、実践してみたわけじや。実際にやつてみると、その助言の適正さは、驚くほぢじや。皆も悩んだときには、やつてみてはどうじや。こうじやもコシは、《うというといする》ことじや。うというといする」といふと、無意識のイメージが捕まえやすくなるのじや。参考までに、わしの知人のU氏の例を載せておひへ。もちろん本人の了解は、もあひておる。

天使通信の例 (S 氏の場合)

彼女に対する私の愛は、偽りの愛でしょうか？

違います。彼女に対する愛は、本物の愛です。

私の愛は、彼女を幸せにするでしょうか？

愛されるものは、愛に満ちます。愛の中で彼女は輝く事でしょう。

彼女と結婚するとして、私は彼女を幸せに出来るでしょうか？

幸せはいつも内面にあります。結婚するというよりも愛する事で人は幸せになるものです。

## 付録三、加重評価表について

人は、しばしば岐路に立ち、選択を迫られる。このような場合、どうすれば間違いない選択をることができるのじやろうか？ひとつ言えることは、どのような場合にも、善意に基づく選択には誤りがないということじや。じやが、善意が拮抗して、自分の中でどちらを選択してよいか、判断がつかない場合はどうするのか？このような場合に、良き判断を与えてくれるのが、加重評価表と呼ばれるものじや。

では、加重評価表とは、いったいどのようなものであるか？平たく言えば、当事者のメリット・デメリットを合計して比較するものじや。では、次に、その具体的な方法を見ていくことにしよう。

まず、加重評価表とは、「Aをするか否か？」の一問一答の問題を解くものである。

用意するものは、紙と鉛筆と電卓じや。表計算ソフトがあれば、なおさら良い。そして、最初に選択肢（「Aをするか否か？」）を決める。次に、「Aをする」事に対しても、その善し悪し（メリットとメリット）を、対象者」として、理由を書いて評価する。評価得点は、メリットの場合は、0点から10点まで、メリットの場合は、0点から-10点までとする。更に、その得点に、0から10までの重みを掛ける。そして、それらを合計して、「Aをする」事に対する総合得点とするのじや。次に、同じことを、「Aをしない」事に対して行なう。そして、最後に、「Aをする」場合と「Aをしない」場合の総合得点どうしを比較し、善し悪しを判断するのじや。もちろん、得点の多い方が採用するべき案となる。

ここで注意すべき点としては、対象者に、「神」と「無限のチヨーン」と「不動のプライド」を加えておくといつ点じや。対象者に、この三者を加えることで、我々は、多角的な視野で、物事を見ることができるようになる。じやが、「神」や「無限のチヨーン」や「不動のプライド」の視点で、メリットとメリットを評価せよ、と言わても、おそらく、そちは、困るであひか。じやから、ここでは、「神は、利他的である

「とを喜び」「無限のチエーンは、人類の繁栄を喜び」「不動のプライドは、そちが、忍耐や歡喜を堪能することを喜ぶ」者であると考えて、評価して下され。また、重みは、「相手：5」「関係者：3」「神：10」「無限のチエーン：7」「不動のプライド：3」を平安として下され。そして、評価表には自分に対する評価を加えないようになりますが、重要なポイントじゃ。自分に対する評価を書き加えると、どうしても利己的なものになってしまつ。じやから、普段は、加重評価表には、自分の気持ちは書かないようにしておくのじや。ただし、労働などで身体を酷使する場合や、全く身体を使わない場合等には、自分の身体に対する評価を、入れておくべきじや。

## 加重評価表

案件： プレゼントをする。

総合得点： 130 点

| 対象者     | メリット      |              |              | デメリット |        |               |              |     |
|---------|-----------|--------------|--------------|-------|--------|---------------|--------------|-----|
|         | 理由        | 評点<br>(0~10) | 重み<br>(0~10) | 合計    | 理由     | 評点<br>(-10~0) | 重み<br>(0~10) | 合計  |
| 彼女      | 嬉しい。      | 8            | 5            | 40    | 驚く。    | -5            | 5            | -25 |
|         |           |              | 5            | 0     | 恥ずかしい。 | -5            | 5            | -25 |
| 神       | 嬉しい。      | 8            | 10           | 80    | ばつが悪い。 | -4            | 5            | -20 |
|         |           | 10           | 0            | 10    |        | 10            | 0            | 0   |
| 無限のチーン  | 嬉しい。      | 8            | 7            | 56    |        | 7             | 0            | 0   |
|         |           | 7            | 0            | 7     |        | 7             | 0            | 0   |
| 不動のプライド | 歡喜を堪能できる。 | 8            | 3            | 24    |        | 3             | 0            | 0   |
|         |           | 3            | 0            | 3     |        | 3             | 0            | 0   |
|         |           | 3            | 0            | 3     |        | 3             | 0            | 0   |
|         |           | 200          |              |       |        |               |              | -70 |
|         | 合計        |              |              |       |        |               |              |     |

## 加重評価表

案件: プレゼントをしない。

総合得点: -58 点

| 対象者     | 理由 | メリット         |              |    | デメリット             |               |              |     |
|---------|----|--------------|--------------|----|-------------------|---------------|--------------|-----|
|         |    | 評点<br>(0~10) | 重み<br>(0~10) | 合計 | 理由                | 評点<br>(-10~0) | 重み<br>(0~10) | 合計  |
| 彼女      |    | 5            | 0            | 0  | 喜べない。             | -5            | 5            | -25 |
| 彼女      |    | 5            | 0            | 0  |                   | 5             | 0            | 0   |
| 神       |    | 10           | 0            | 0  | 私の成長を見ら<br>わない。   | -1            | 10           | -10 |
| 神       |    | 10           | 0            | 0  |                   | 10            | 0            | 0   |
| 無限のチューン |    | 7            | 0            | 0  | 一人の愛の姿が<br>見られない。 | -2            | 7            | -14 |
| 無限のチューン |    | 7            | 0            | 0  |                   | 7             | 0            | 0   |
| 不動のブライド |    | 3            | 0            | 0  | 欲言を体験でき<br>ない。    | -3            | 3            | -9  |
| 不動のブライド |    | 3            | 0            | 0  |                   | 3             | 0            | 0   |
| 合計      |    | 0            |              |    |                   | 3             | 0            | -58 |
| 合計      |    |              |              |    |                   |               |              |     |

## 総合判定

| 案件        | 総合得点 |
|-----------|------|
| プレゼントをする。 | 130  |
| プレゼントしない。 | -58  |

#### 付録四、自己レベル・チェックシートについて

心の進歩を考える上で、現在の心のレベルを知ることは、とても重要なことじゃ。

人は、己の心のレベルに無頓着であれば、知らず知らずのうちに、心のレベルを落としてしまうじやろ。じゃが、現在の心のレベルが分かつておれば、それを基に、対策を立てて、そこから立ち直ることもできるのじや。そこで、皆に、わしの作った「自己レベル・チェックシート」を紹介しよう。使い方は、いたつて簡単じや。皆も試して下され。

まず、1から4までの4つの質問に答える。例えば、「あなたは、どれくらい愛しますか?」と問うので、指標を参考に回答するのじや。例えば、自分を省みない人は2点、自分と他人をそぞろに愛する人は5点、とこうあんばいじや。得点が、

小数点でもOKじゃ。そして、4つの質問に答えたたら、各質問に重みを掛けて合計するのじゃ。問い合わせ1の重みは4点、それ以外は2点じゃ。合計点が、98点以上なら、合格じゃ。それ未満は、まだまだじゃな。

自己レベルチェックシート(問1)

あなたは、どのくらい愛しますか？

指標

|            |    |
|------------|----|
| 全てを愛する。    | 10 |
| 全生命を愛する。   | 9  |
| 全人類を愛する。   | 8  |
|            | 7  |
| 自分と他人を愛する。 | 6  |
|            | 5  |
| 自分を愛する。    | 4  |
|            | 3  |
| 自分を愛さない。   | 2  |
|            | 1  |
| まったく愛さない。  | 0  |

貴方の自己採点は？ = >  点 =A

自己レベルチェックシート(問2)

あなたは、どのくらい自己を高めようと努力していますか？

## 指標

常に努力している。

|    |
|----|
| 10 |
| 9  |
| 8  |
| 7  |
| 6  |
| 5  |
| 4  |
| 3  |
| 2  |
| 1  |
| 0  |

大抵、努力している。

時々努力している。

まったく努力しない。

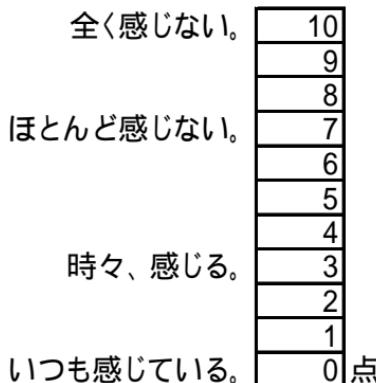
点

貴方の自己採点は？ = >  点 =B

自己レベルチェックシート(問3)

あなたは、どのくらい恨み,妬み,怒りを感じますか？

指標



貴方の自己採点は？ = >  点 = C

自己レベルチェックシート(問4)

あなたは、どのくらい生・老・病・死を嫌に思いますか？

## 指標

|               |     |
|---------------|-----|
| 全く嫌に思わない。     | 10  |
|               | 9   |
|               | 8   |
|               | 7   |
| 死を嫌に思う。       | 6   |
|               | 5   |
| 病・死を嫌に思う。     | 4   |
|               | 3   |
| 老・病・死を嫌に思う。   | 2   |
|               | 1   |
| 生・老・病・死を嫌に思う。 | 0 点 |

貴方の自己採点は？ = >  点 =D

自己レベルチェックシート(評価結果)

貴方の、自己レベルは？ = >

Aの得点 × 4 =  点

Bの得点 × 2 =  点

Cの得点 × 2 =  点

Dの得点 × 2 =  点

---

合計: =  点

## 付録五、人間の構造について

最後に、わしの思う人間の構造を次に示そう。

人は、様々な要素を内包し、社会に向けて貢献してゆく。  
まこと、人とは、美しい。

神

愛

善意

無限のチェーン

不動のプライド

誠実 知識 創造性

社会貢献

おわりに

ああ、世界が幸せでありますよう。

ج